

平成 2 1 年 7 月 2 日 ・ 3 日

於：京都市「京都ガーデンパレス」

講演 II

書籍館と博物館

—その成立と相互の関連—

聖徳大学川並記念図書館

副館長 椎名仙卓 氏

主催：財団法人私学研修福祉会

協力：日本私立短期大学協会

講演 II

書籍館と博物館 — その成立と相互の関連 —
聖徳大学川並記念図書館
副館長 椎名仙卓

I 書籍館、動物園、植物園、研究・陳列館 を包括した施設を「博物館」と称した

- ① 辞書類に記された museum の訳語
- ② 田中芳男の見たジャルダン・デ・プラント
- ③ 福沢諭吉の「西洋事情」に記された博物館
- ④ わが国で最初に開かれた博覧会から博物館が誕生する
- ⑤ 「博物学の所務」を基本として博物館を設置する

II 通俗教育の中での図書館と博物館の役割

- ① 通俗教育調査委員会官制の公布により、図書館、博物館で“通俗教育”を担当する
- ② 東京教育博物館の「通俗教育館」の誕生で、博物館のイメージが変わる
- ③ コレラ病の蔓延を防止するため特別展を開催する
- ④ 「全国安全週間」と「緑十字」は、博物館の特別展覧会の附帯事業として誕生し、全国に普及した。

辞書などに記された Museum (Musée) の訳語

事典等の書名	発行年	訳名
1 英和对訳袖珍辞書	1866 (慶応2)	学術ノ為ニ設ケタル場所 学術ノ為ニ設ケタル場所 学術ノ為ニ設ケタル場所
2 改正増補英和对訳袖珍辞書	1866 (慶応2)	学術ノ為ニ設ケタル場所 学術ノ為ニ設ケタル場所
3 改正増補英和对訳袖珍辞書	1867 (慶応3)	学術ノ為ニ設ケタル場所 学術ノ為ニ設ケタル場所
4 和訳英辞書	1869 (明治2)	学術ノ為ニ設ケタル場所 学術ノ為ニ設ケタル場所
5 英華字集	〃 (同治8)	博物院
6 西語訳漢入門	〃 (〃)	書房
7 大正増補和訳英辞林	1871 (明治4)	学術ノ為ニ設ケタル場所 (学術ノ為ニ設ケタル場所)
8 官許仏和辞典	〃 (〃)	博覧所
9 英和对訳辞書	1872 (明治5)	博物館
10 享和袖珍字書	〃 (〃)	学術ノ為ニ設ケタル場所 (学術ノ為ニ設ケタル場所)
11 英華萃林韻府	〃 (同治11)	博物院
12 附音挿図英和字集	1873 (明治6)	博物館
13 独和字典	〃 (〃)	学術ノ為ニ設ケタル場所 ニテ諸器械其他書籍等ヲ 集メ置ク所
14 広益英倭字典	1874 (明治7)	学術ノ為ニ設ケタル場所 (学術ノ為ニ設ケタル場所)
15 英和对訳字集	1885 (明治18)	学術ノ為ニ珍器諸物ヲ貯 置ク場所 (学術ノ為ニ珍器諸物ヲ貯 置ク場所)
16 附音挿図英和字集	〃 (〃)	博物館
17 英和和英字集大全	〃 (〃)	博物館
18 英和对訳辞典	〃 (〃)	博物館
19 英和字集	1886 (明治19)	博物館
20 大正増補和訳英辞林	〃 (〃)	学術ノ為ニ設ケタル場所 (学術ノ為ニ設ケタル場所)
21 仏和辞典	〃 (〃)	博覧所
22 仏和辞林	〃 (〃)	文藝講習館 (古義) 博物館 (今義)
23 増補訂正和英対訳いろは字典	1887 (明治20)	博物館
24 英和双解字典 (第3版)	〃 (〃)	博物館
25 露和字集	〃 (〃)	博物館
26 挿入図書独和字典大全 (第2版)	〃 (〃)	博物館
27 華英字典集成	〃 (光緒13)	博物院
28 仏和字集	1893 (明治26)	文藝講習館 (古義) 博物館 (今義)



田中芳男肖像画 中原隆二郎画 大正八年(一九一九)



伊藤圭介

[名古屋市立東山植物園提供]

田中芳男は、天保九年(一八三八)八月、信州飯田に医師田中隆三(如水)の三男として生まれた。

芳男は、飯田の文化的な風土を背景に、伊那谷の豊かな動植物に親しむ一方、父などから中国の古典を習い、父の所蔵する翻訳書を読んで海外の先進的な知識に触れた。

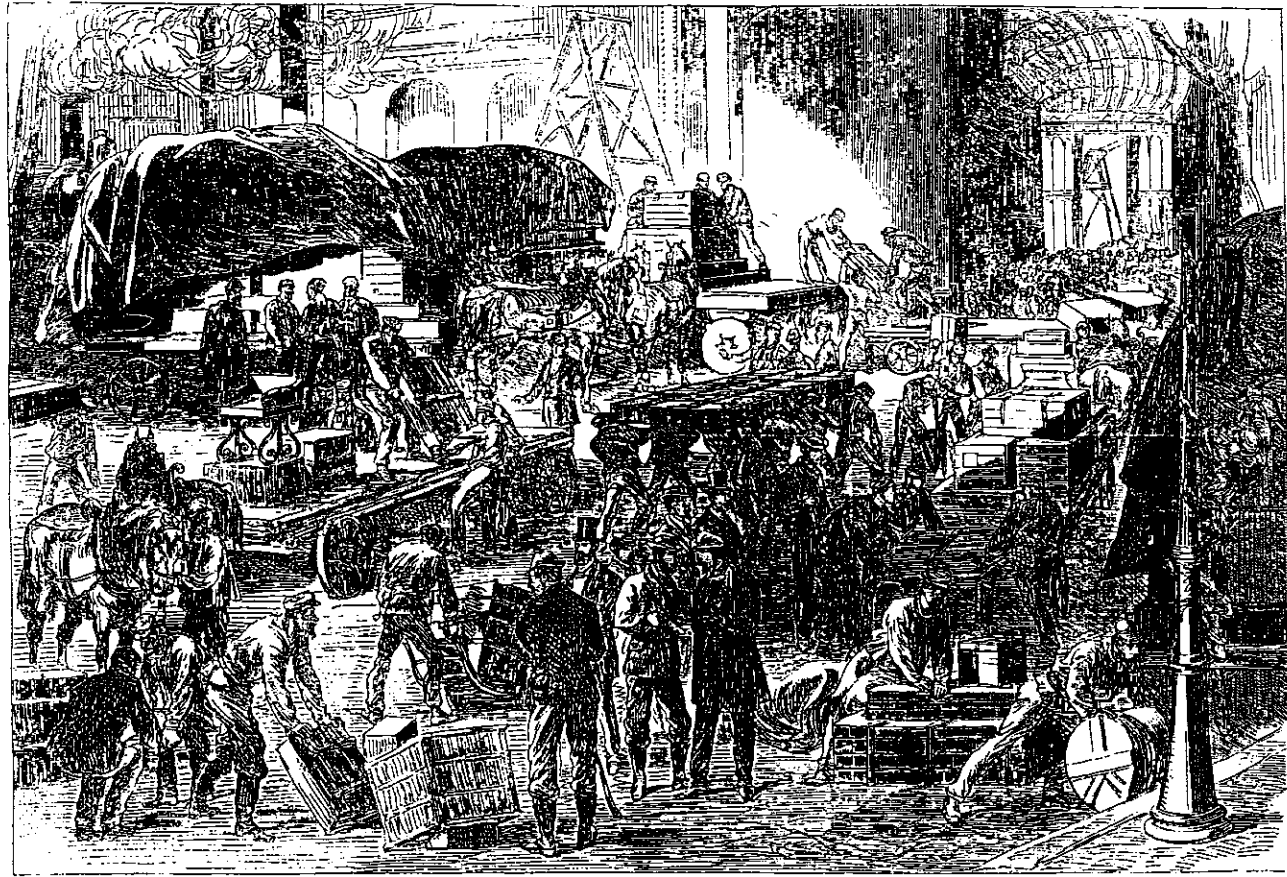
飯田で勉学に励んだ田中芳男ではあったが、「田舎におっつてはとも仕方がない」と、安政三年(一八五〇)、一九才で名古屋に出た。ここで、尾張洋学の泰斗伊藤圭介に出会い、本草学を学んだ。

二四才の時、芳男は伊藤に同行して江戸に出て、幕府の洋学研究教育機関である蕃書調所^{ばんしょていじょ}で働いた。蕃書調所では物産所に身をおき、海外から送られてきた穀物・野菜・花物などの植物を試験栽培したり、物産関係の洋書を和訳したり、国内の産物調査などをおこなった。

慶応三年(一八六七)のパリ万国博覧会への参加は、田中芳男にとって大きな飛躍の機会となった。出品物の輸送と展示を任された芳男は、無事に大役を果たし、皇帝ナポレオン三世とフランス殖産協会からメダルを贈られている。

芳男は、この六ヵ月間のパリ滞在中に博覧会とは何か、博物館とはどういうものを学んだ。なかでもパリのジャルダン・デ・プラントという、自然史博物館・動物園・植物園を含んだ広大な施設は芳男にとって博物館の理想像となった。

芳男は、その後新政府のもとで、町田久成^{ひまわり}とともに日本の博物館創設にかかわっていくことになる。



THE PARIS INTERNATIONAL EXHIBITION: RECEIVING GOODS—SEE PAGE 174.

THE JAPANESE JUGGLERS.

The wonderful and amusing performances of the Japanese company of jugglers and posture-makers at St. Martin's Hall continue to attract a nightly crowd of spectators. We present a couple of illustrations, showing two of their cleverest and most original tricks. One of these feats of dexterity is that exhibited by the famous top-spinner, Ja-Ha-See, who spins his top with a string wound round it in the usual manner,

but contrives to make it go through such nimble and various movements that it seems almost a living creature. Sometimes, instead of releasing it to spin by itself, he detains it at the farther end of the string, which by the tension becomes as rigid as a stick, and is stretched in a slanting or vertical position upwards from the man's hand, with the top whirling on its axis at the end of the line, as it appears in our engraving. There is another very pretty trick, done

by a light-fingered artist named Aki-Mitchi-Sen, who makes little paper butterflies and keeps them hovering in the air by the wind of a pair of fans, causing them to fly to and fro at his pleasure, to settle on a nosegay of flowers, and to rise again, seemingly with the easy motions of life. The performances are accompanied with the music of the Japanese guitar, drum, and other instruments, and with shouts of mirth from a small chorus of Japanese children.

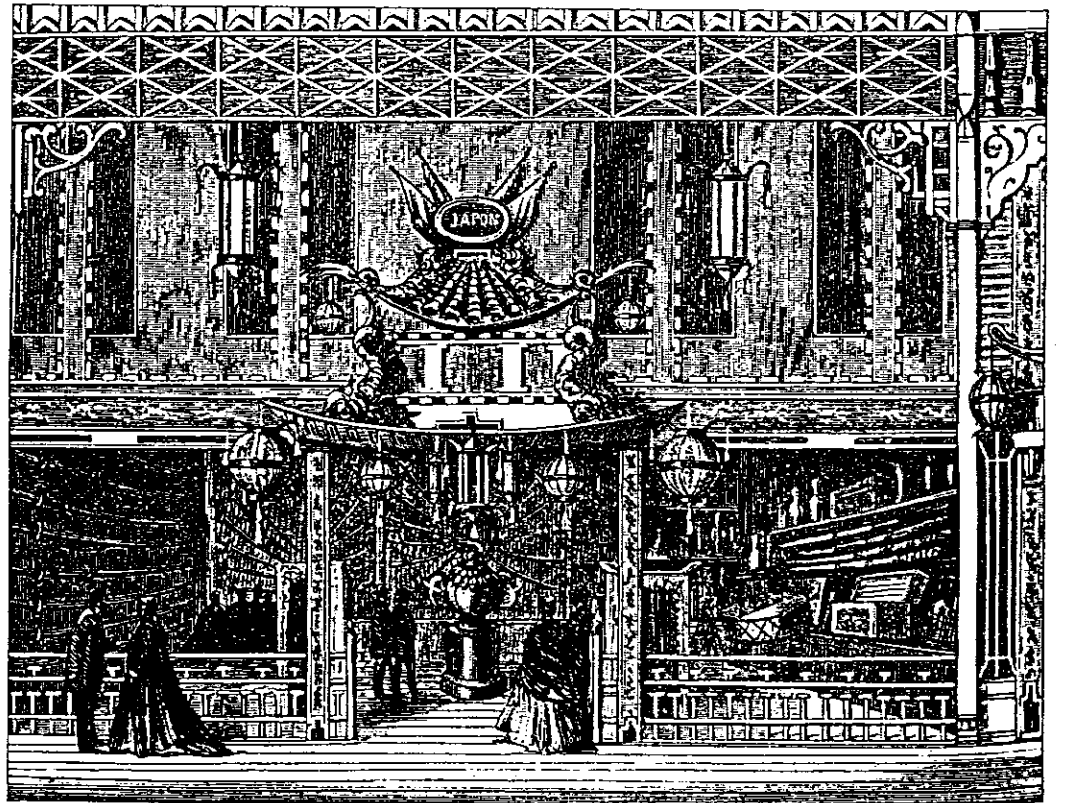


THE BUTTERFLY TRICK.



THE TOP-SPINNER.

THE JAPANESE JUGGLERS AT ST. MARTIN'S HALL.

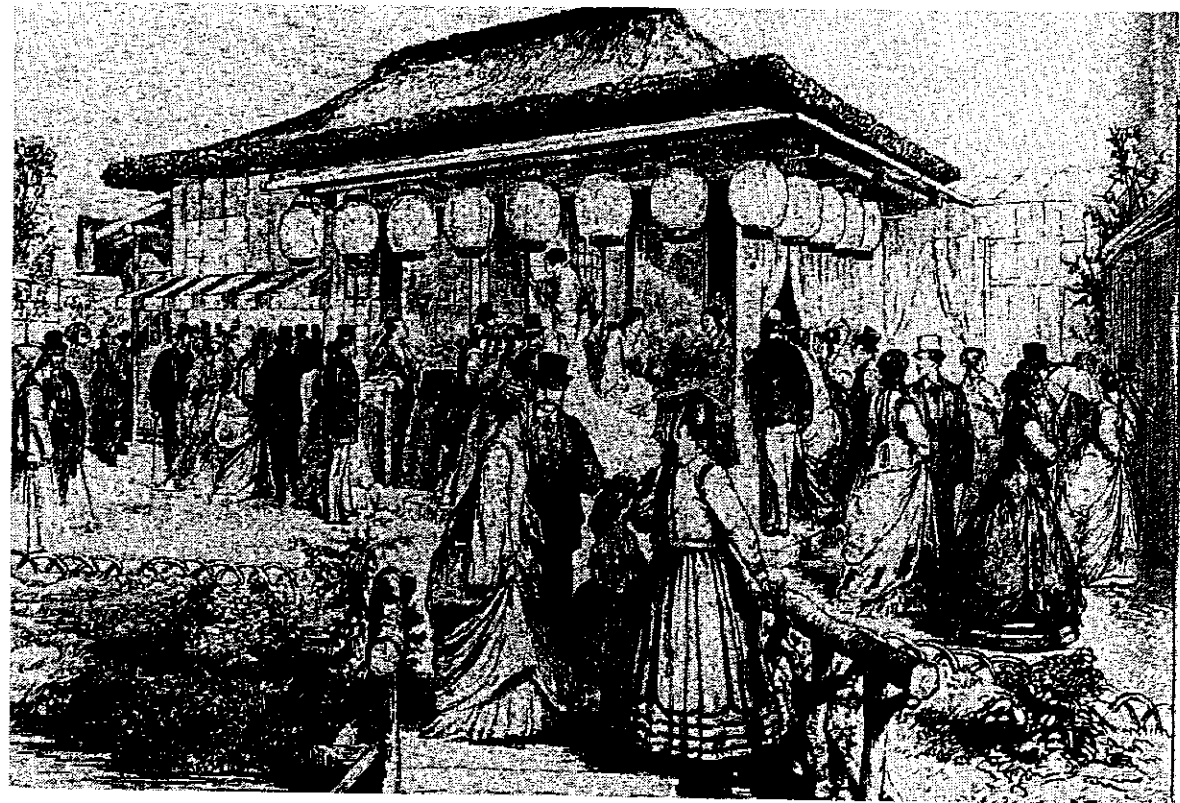


パリ万博日本展示館の正面
〔ル・モンド・イリュストレ〕1867年10月12日

それから慶応二年になりまして、フランスから、来年万国博覧会を開くに付いては、日本からも出品してくれという事で、政府で参同出品することになりまして、いろいろな物を見立てて買集めしました。ところが、ふつうの商売品だけでは面白くないから、是非昆虫類を出してくれという事であった。しかし標本も無く、また、だれも引き受ける人が無いから、そこでまた田中芳男が引き受けることになってきた。それで、いろいろ標本を蒐めて出すことになりました。ところが、道具も無ければ、どうして宜しいか方角も立たぬ。日本ではこのころ昆虫類の標本をどうして拵えたかという、針を刺してやらなければならぬということを知っておって、針を刺したのではあるが、鉄針などでやったのであるから、錆びて具合が悪い。が、それより仕方が無いから、木綿針・絹針の古物でもって刺してみた。ところが、あの針ではどうも宜しくない。そのころ西洋から来ておる留針がよいということで、横浜に問い合わせたら、仕立て屋で用いる太いものほか無い、当今のよな気の利いた留針は無い。それで、その太い留針でやることにした。その虫を捕るのはどういふ道具かという、この頃のような立派なものが無いから、魚を掛う網を買い求めてそれで捕りました。それから箱は小伝馬町に桐の組箱を売る家があったから、そこで買いました。

ところが、江戸では虫が捕れませぬから、近国に出張して採集することになり、相模・伊豆・駿河の三国、ならびに下総に出掛けたのであります。それで、私一人ではいかぬから、外に手伝いが二人、お供が三人、都合六人連れて虫捕御用に出掛けました。その時分に虫捕御用というのは面白からぬから、物産取調御用という立派な名義で出掛けました。地方の人は何を調べられるか分からぬ、これは調べて運上でも余計取られるだろう、という念慮を起こした者もあつたようなことであつた。

それから、昆虫のほうばかりということでもなく、外の仕事もしてくれろということでも、他の博覧会出品のお手伝いを致しまして、遂に仏国行きを命ぜられました。

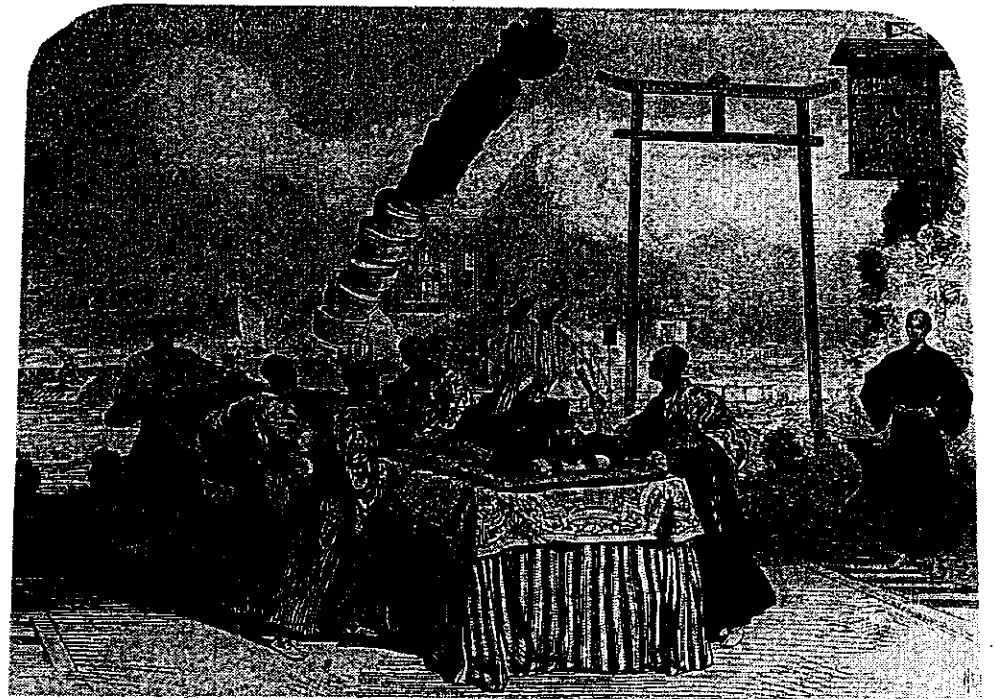


●パリ万国博覧会の「日本茶店」



●「日本茶店」内の三人の芸者

日本茶店は、連日大入り満員で、茶店の木戸銭収入は六万五千フラン、これは清水卯三郎が万博会場で売り上げた出品物の五万七千フランを上回るものであった。

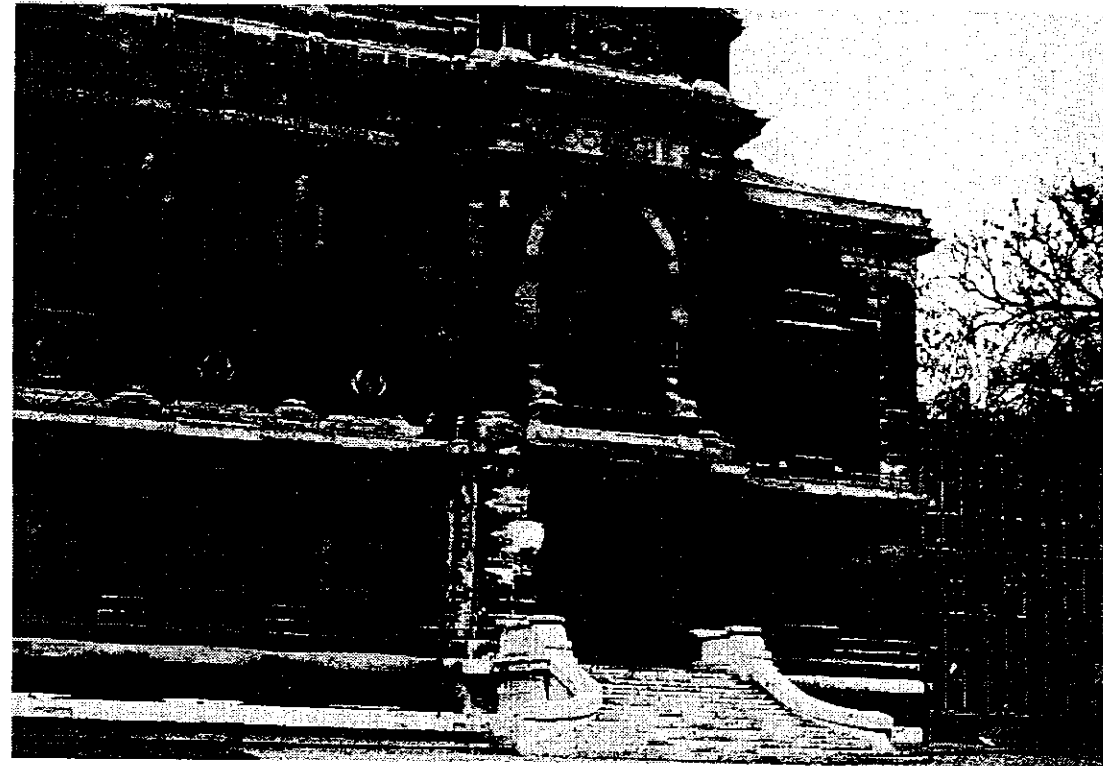


●帝国日本芸人一座の「数小桶上乘之曲芸」(桶の最上にあるのが梅吉で、「はねむしの芸」ともいう。ライシウム劇場、「ザ・イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」1868年5月2日)[上]

●隅田川浪五郎の「蝶の舞」(「ル・モンド・イリュストレ」1867年11月23日)[下]

各国で開いていた博覧会は、さまざまな形で開かれており、諸外国に出品を要請したりしているが、やがて、政治や宗教を超越して、人類の英知を集めた万国博覧会が誕生することとなる。

- | | | |
|--------|--------|------------|
| 第1回万国博 | ロンドン | 1851年(嘉永4) |
| 第2回万国博 | ニューヨーク | 1853年(嘉永6) |
| 第3回万国博 | パリ | 1855年(安政2) |
| 第4回万国博 | ロンドン | 1862年(文久2) |
| 第5回万国博 | パリ | 1867年(慶応3) |



ジャルダン・デ・プラントの動物館

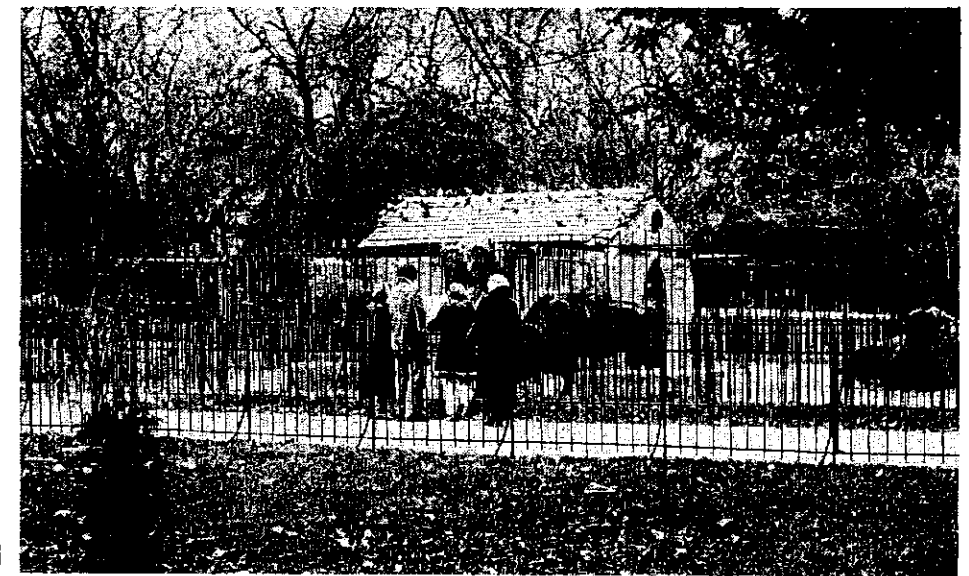


ジャルダン・デ・プラント内にある温室

ジャルダン・デ・プラント



正面入口 中央はラマルクの銅像



動物園

博物館

博物館は、世界中の物産、古物、珍物を集めて人に示し、見聞を博くする為めに設るものなり。ミネラロジカル・ミュゼムと云へるは、礦品を集むる館なり。凡世界中金石の種類は尽く之を集め、各其名を記して人に示す。ゾーロジカル・ミュゼムと云へるは、禽獸魚虫の種類を集むる所なり。禽獸は皮を取り、皮中に物を填て其形を保ち、魚虫は薬品を用て其儘干し固ため、皆生物を見るが如し。小魚虫は火酒に浸せるものもあり。○又、動物園、植物園なるものあり。動物園には生ながら禽獸魚虫を養へり。獅子、犀、象、虎、豹、熊、狐、狸、猿、兔、駝鳥、鷲、鷹、鶴、雁、燕、雀、大蛇、蝦蟇、総て世界中の珍禽奇獸、皆此園内にあらざるものなし。之を養ふには、各其性に從て、食物を与へ、寒温湿燥の備をなす。海魚も玻璃器に入れ、時々新鮮の海水を与へて、生ながら貯へり。植物園にも、全世界の樹木、草花、水草の種類を植へ、暖国

の草木を養ふには、大なる玻璃室を造り、内に鉄管を横たへ、管内に蒸氣を通じて温を取る。故に此玻璃室内は、嚴冬も常に八十度以上の温氣ありて、熱帯諸国の草木にてもよく繁殖す。○メヂカル・ミュゼムとは、専ら医術に属する博物館にて、人体を解剖して、或は骸骨を集め、或は胎子を取り、或は異病にて死する者あれば、其病の部を切取り、經驗を遺して後日の為めにす。此博物館は多く病院の内にあり。

ここには、世界中の物産、古物、珍物を集めて人に示し、見聞を博くするために設けたものであるとしている。そして、この文中では五種の博物館を挙げて説明している。

- ① ミネラロジカル・ミュゼム(鉱物博物館)
- ② ゴーロジカル・ミュゼム(動物学博物館)
- ③ 動物園
- ④ 植物園
- ⑤ メヂカル・ミュゼム(医学博物館)

栗本勘雲が記した『ほう庵遺稿』の中に、フランスのロッシュ公使の通訳である和春(カシオン)が明年フランスでエキスポジション(Exposition)を開くので日本も参加して欲しい。このエキスポジションは"広く示す"という義であるが、日本語では何と言ったらよいか、との質問であった。それに対し栗本は、医学館で、"薬品会"と言うのがある。ここには天下の物品は何でも陳列している。規模の大小はあってもこれとよく似ている。それではエキスポジションは「博覽會」としなさい、と言っている。こうして博覽會という表現は広く一般に用いられるようになる。

西洋事情卷之一

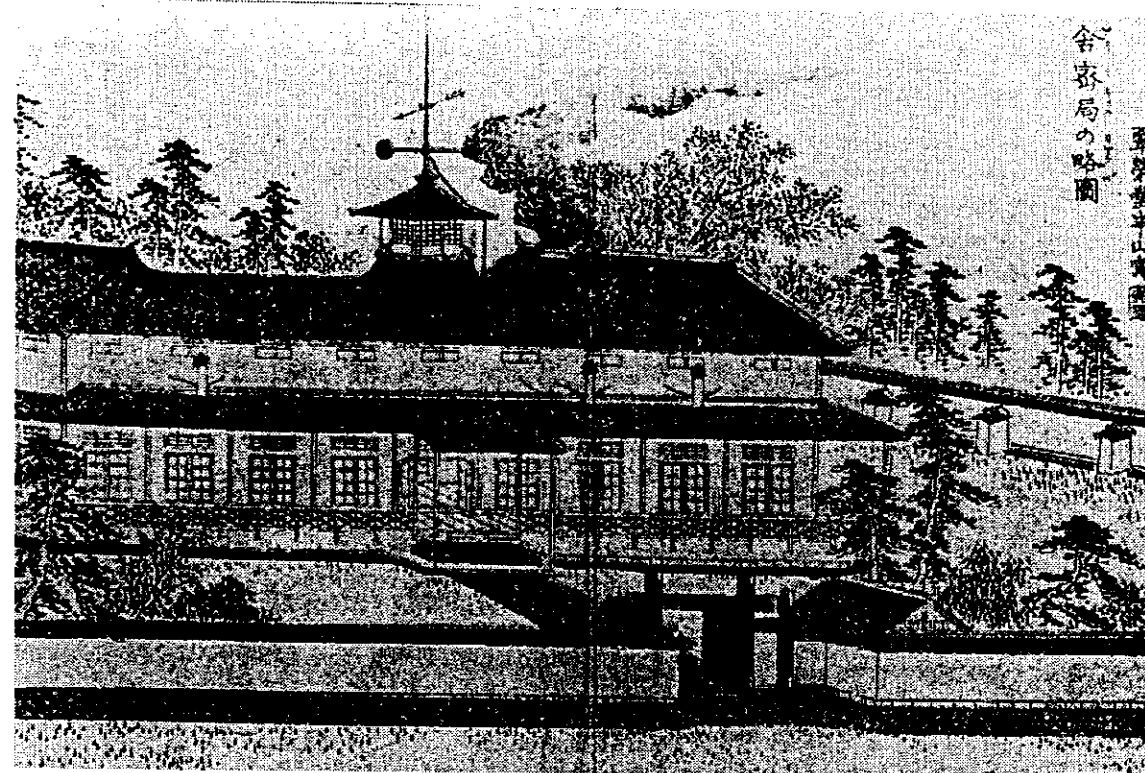
博覽會

一 前条の如く、各国に博物館を設けて、古来世界中の物品を集むと雖ども、諸邦の技芸工作、日に開け、諸般の発明、随て出、随て新なり。之が為め、昔年は稀有の珍器と貴重せしものも、方今に至ては陳腐に属し、昨日の利器は今日の長物となること、間、少なからず。故に西洋の大都会には、数年毎に産物の大会を設け、世界中に布告して各其国の名産、便利の器械、古物奇品を集め、万国の人に示すことあり。之を博覽會と称す。凡そ当時、世に行はる、諸種の蒸氣機関、越列機、瓦兒華(尼)の器械、火器、時計、竜吐水、農具、馬具、台場、軍艦、家作等の雛形、衣服、冠履、文房具、化粧道具、古代の名器、書画等、一々枚挙するに遑あらず。之を概すれば、人間衣食住の需用、備はらざるものなしと云て可なり。斯く千万種の品物を一大廈の内に排列して、五、

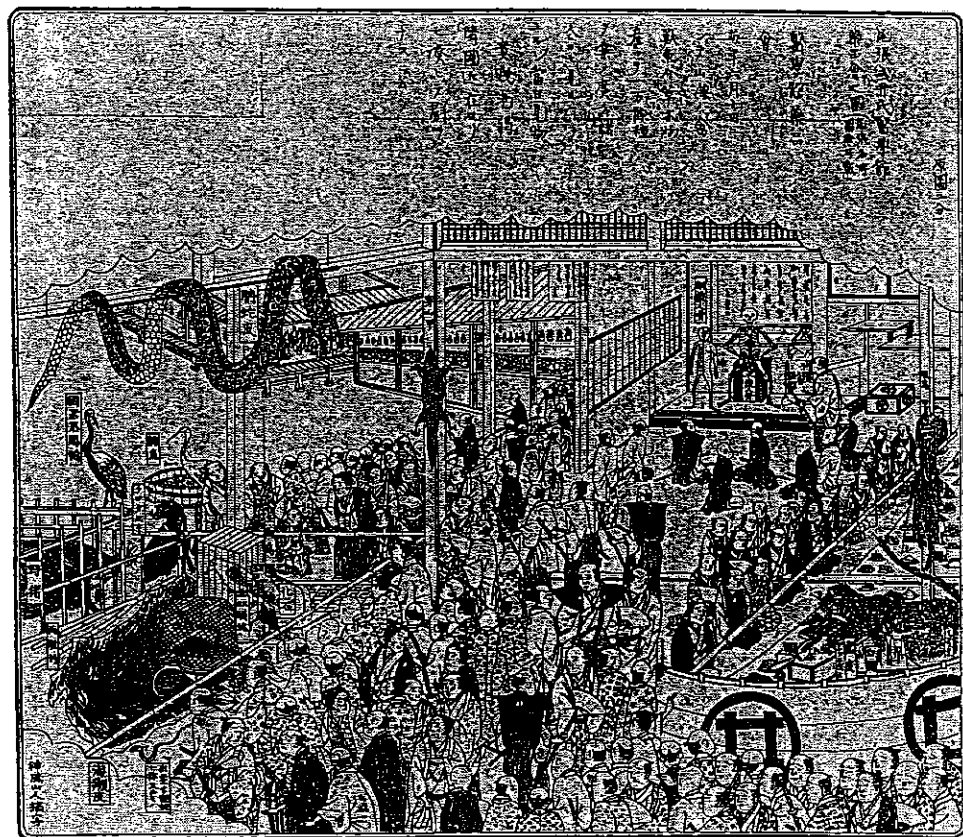
六ヶ月の間、諸人の展観に供し、器品の功用は各、其主人ありて之を弁解す。諸人之を觀て買はんと欲すれば、直に博覽場の物は得べからざれども、之を産し之を製する所より定価を以て買取るべし。又博覽會の終に至れば、会に出したる品物も入札の売買あり。○都會に博覽場を開く間は、諸邦の人、皆、に輻湊して、一時都下の繁昌を致す。千八百六十二年、竜動に博覽場を設け、毎日、場に入るもの四、五万人に下らず。○博覽會は、元と相教へ相学ぶの趣意にて、互に他の所長を取て己の利となす。之を譬へば智力工夫の交易を行ふが如し。又、各国古今の品物を見れば、其国の沿革風俗、人物の智慧をも察知す可きが故に、愚者は自から励み、智者は自から戒め、以て世の文明を助くること少なからずと云ふ。

博覧会の計画と実施

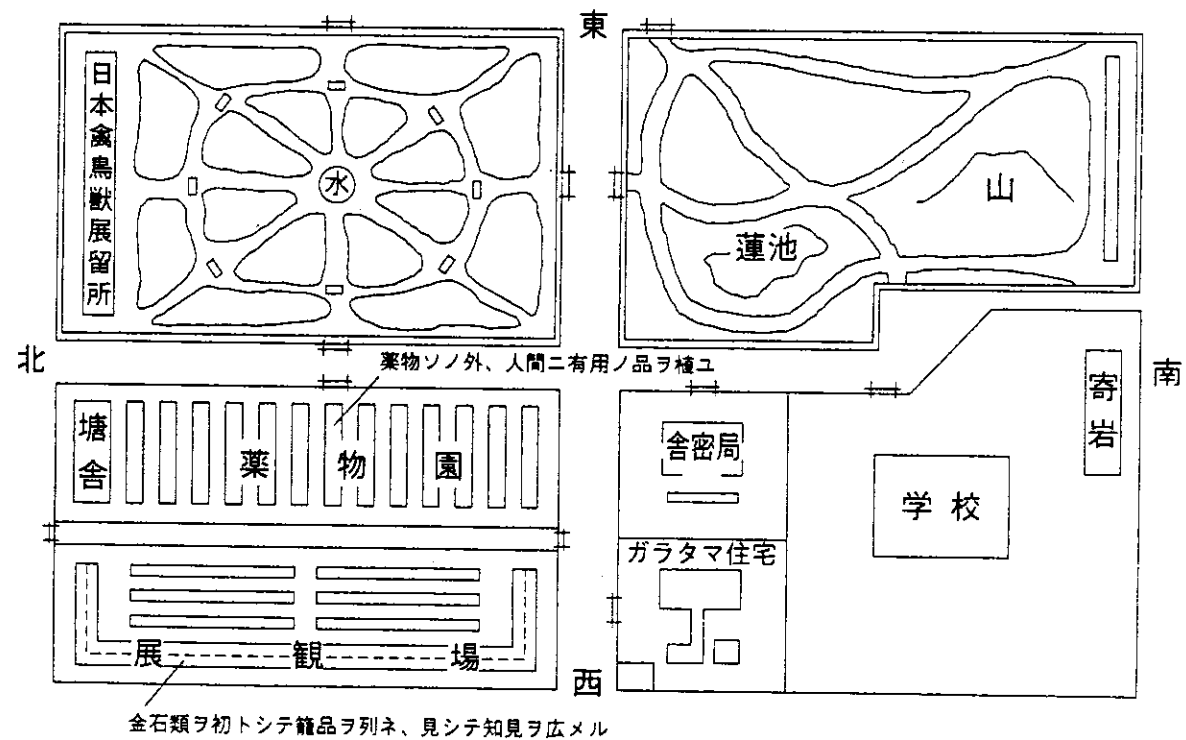
	名称	主催部局	開催期間	開催場所	趣旨
I	計画 博覧会	大学南校博物館	明4年5月5日 から晦日まで	九段坂上 三番薬園 兵部省地	博覧会ノ主意ハ宇内ノ産物ヲ一場ニ蒐集 シテ其名称ヲ正シ其有用ヲ弁シ或ハ以テ 博識ノ資トナシ或ハ以テ証徴ノ用ニ供シ 人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ寡聞因陋ノ 弊ヲ除カントスルニアリ
	実施 物産会	大学南校物産局	明4年5月14日 から7日間	招魂社境内	
II	計画 博覧会	文部省博物館 (布告掲物には 文部省博物館)	明4年10月1日 から10日間	湯島大成殿	博覧会ノ旨趣ハ天造人工ノ別ナク宇内ノ 産物ヲ蒐集シテ其名称ヲ正シ其用方ヲ辨 シ人ノ知見ヲ広ムルニ在リ就中古器旧物 ニ至テハ時勢ノ推遷制度ノ沿革ヲ追徴ス 可キ要物ナルニ因リ閣者御布告ノ意ニ原 キ周ク之ヲ羅列シテ世人ノ放観ニ供セント 欲ス
	実施	従来開いたと記した書物もあるが、実際は計画だけで 開催していない			
III	計画 博覧会	文部省博物館 (文部省博物館)	明5年3月10日 から20日間	湯島聖堂	上記の趣旨と全く同文である
	実施 博覧会	文部省博物館 (文部省博物館)	明5年3月10日 から4月晦日まで	湯島聖堂	



舎密局の略図



尾張浅井氏医学館薬品会之図



舎密局の設計図

文部省 博物館

五月十五日

一、出品品、必、特主ノモノ、此レノ類、可、事
 一、出品品、三月十日、二十日、開、限、展、覽、毎
 一、朝九時、午後四時、限、但、常備、品、一、六、ノ
 一、同、時、別、間、拜、見、相、成、候、事
 一、拜、見、入、見、上、申、上、ハ、二、日、一、大、略、十、八、限、拜、見、ノ
 一、切、手、相、次、候、間、右、持、込、致、可、不、事
 一、切、手、ハ、文、部、省、博、物、館、及、シ、博、物、館、方、書、林、ハ、相、渡、シ、申、上、可
 一、但、一、枚、一、人、下、一、限、事

博覧会布告の摺物 (明治5年)

三月十日、十五日、
 朝第九時、午後四時、
 博覧會

拜見入
 一枚
 切手
 但切
 常備品
 事

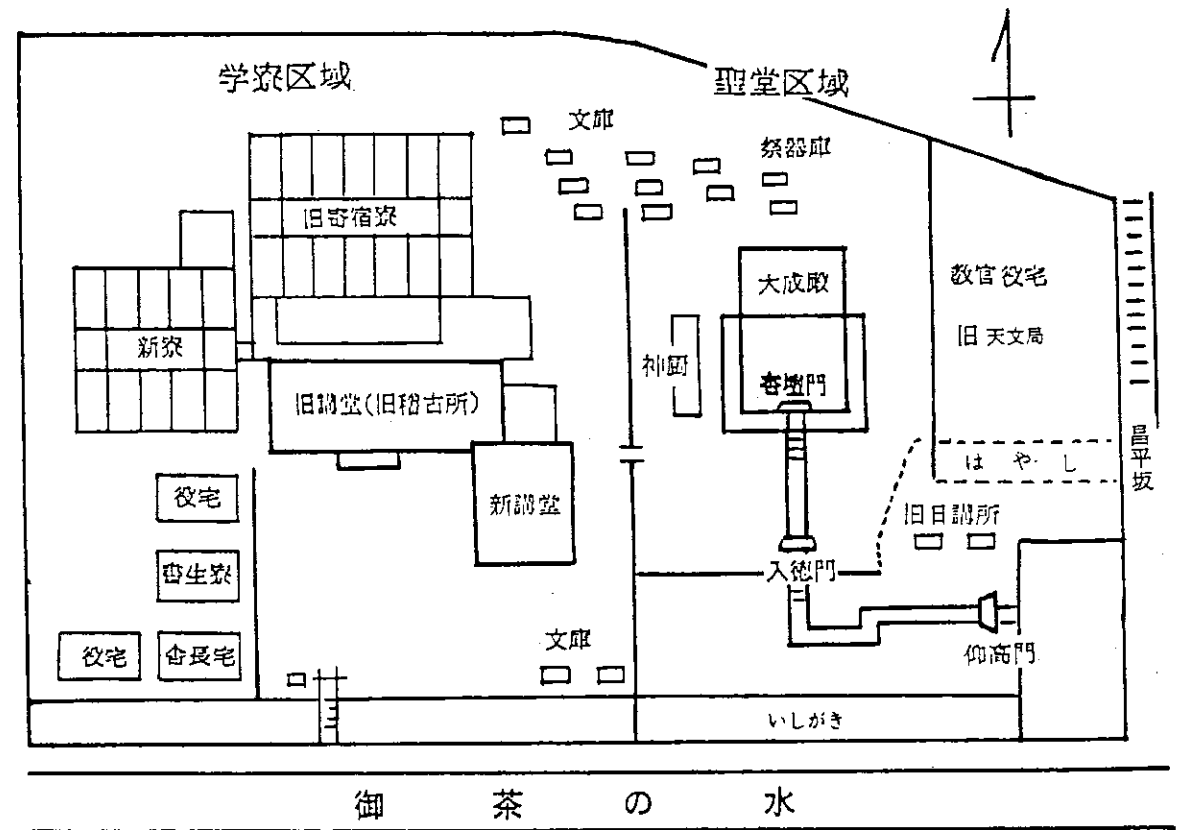
五月十五日

博覧会のビラ (明治5年)

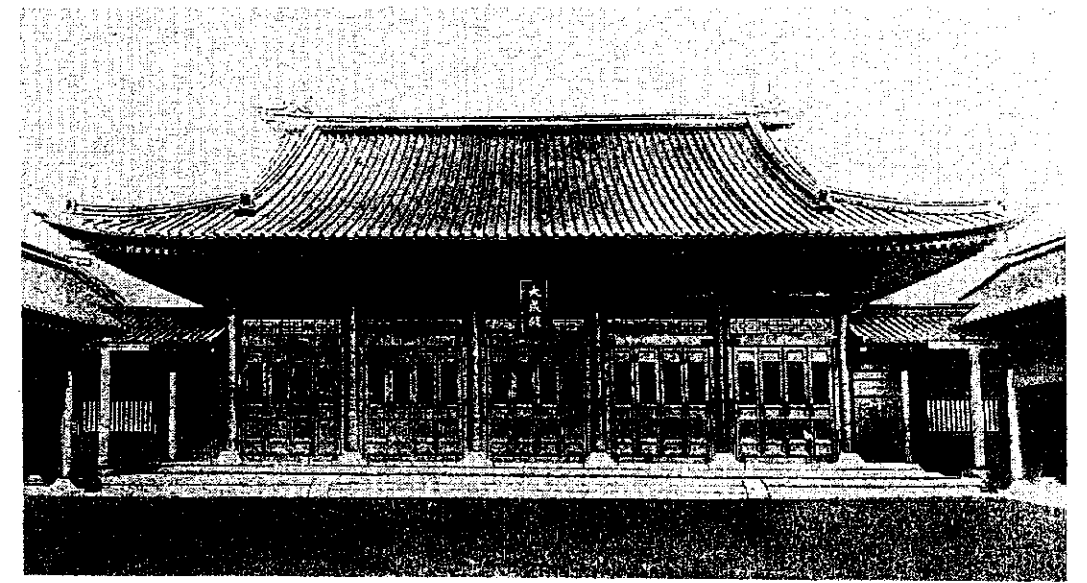
明治五年、三月、十日、
 博覧會
 元昌平阪聖堂
 博物館

明治五年三月十日、
 元昌平阪聖堂
 博物館

最初の観覧券

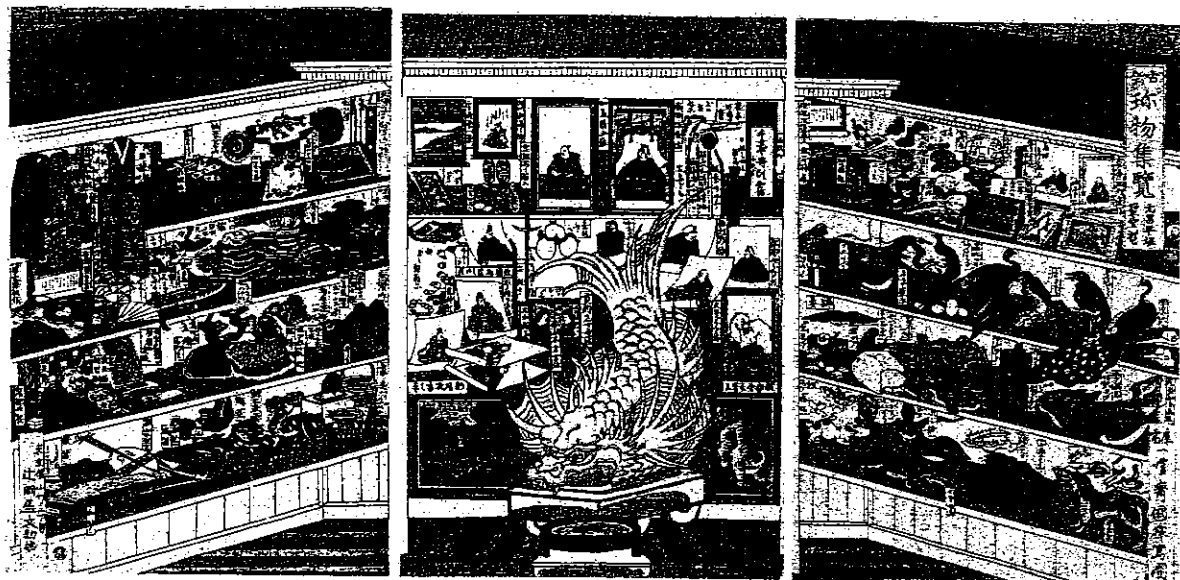


湯島聖堂構内略図 (明治3年)



現在の大成殿 旧大成殿は関東大震災で焼失

錦絵に画かれた明治5年開催の博覧会（一曜斎国輝画）

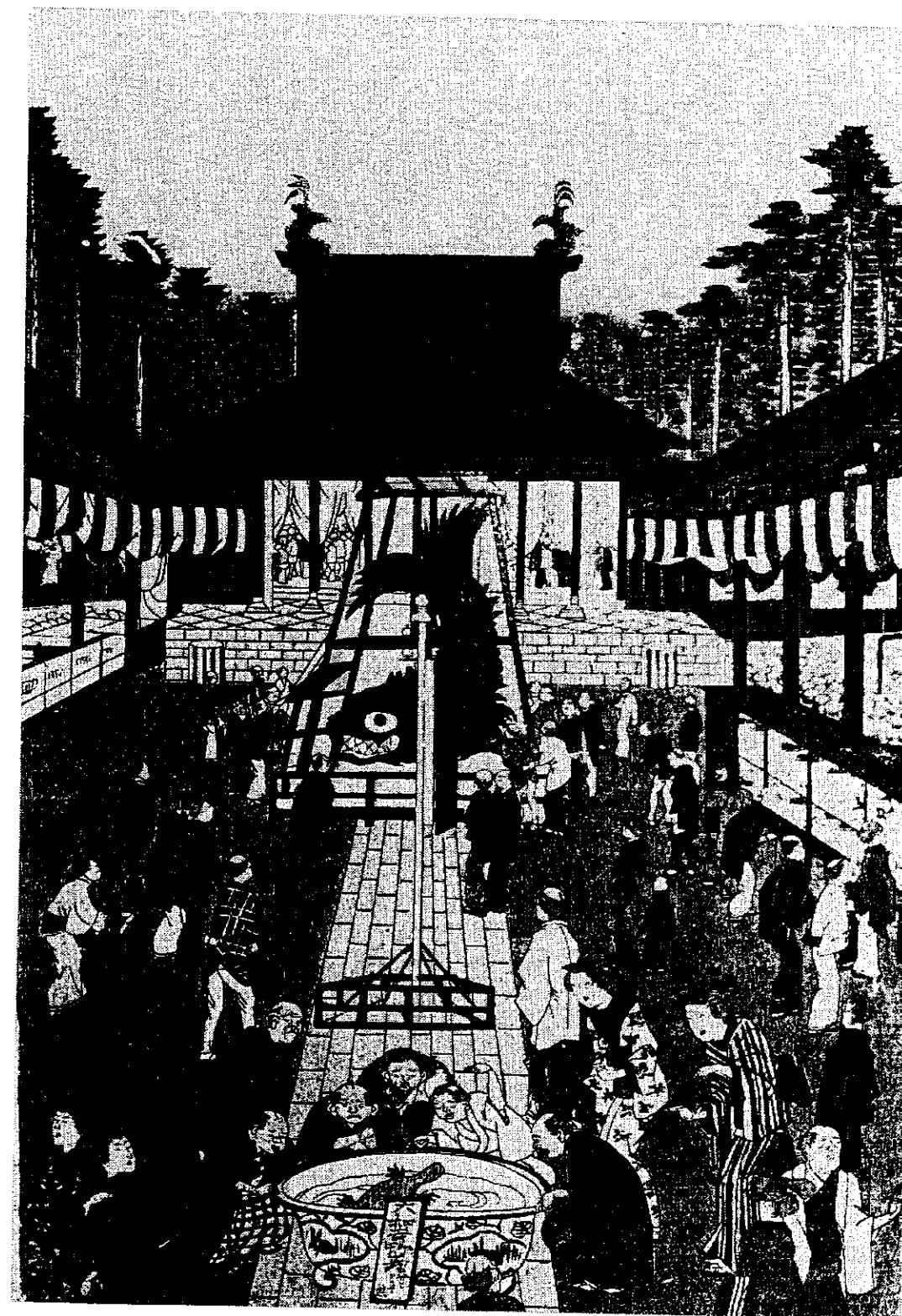


古今珍物集覧 一曜斎国輝筆

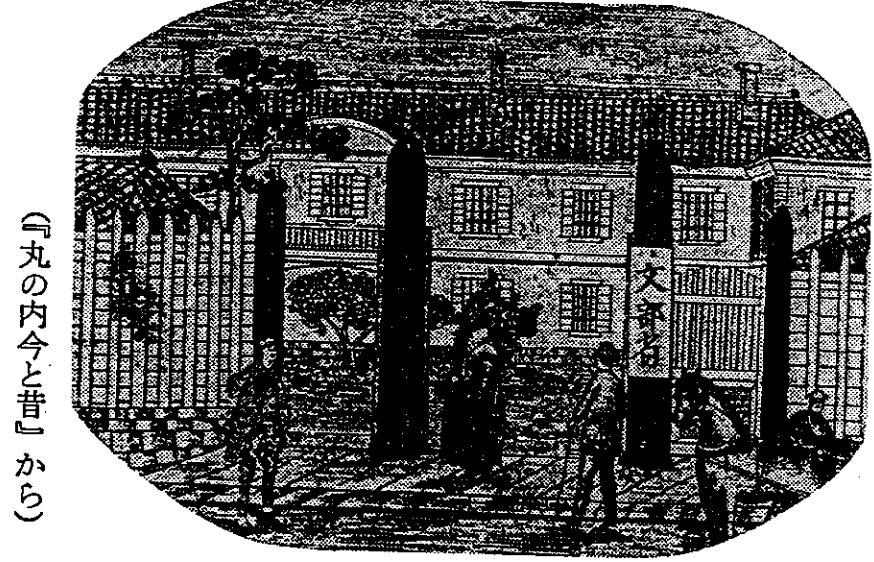
湯島聖堂前での記念撮影(明治5年)



湯島聖堂での記念撮影
金のしゃちほこの前で。中央扇を持っているのが伊藤圭介、
右から2人目が町田久成、4人目が田中芳男、左から2人目
が服部雪齋、6人目が蜷川式胤。



博覧会図 昇斎一景筆 (明治5年)



『丸の内今と昔』から

国立国会図書館蔵

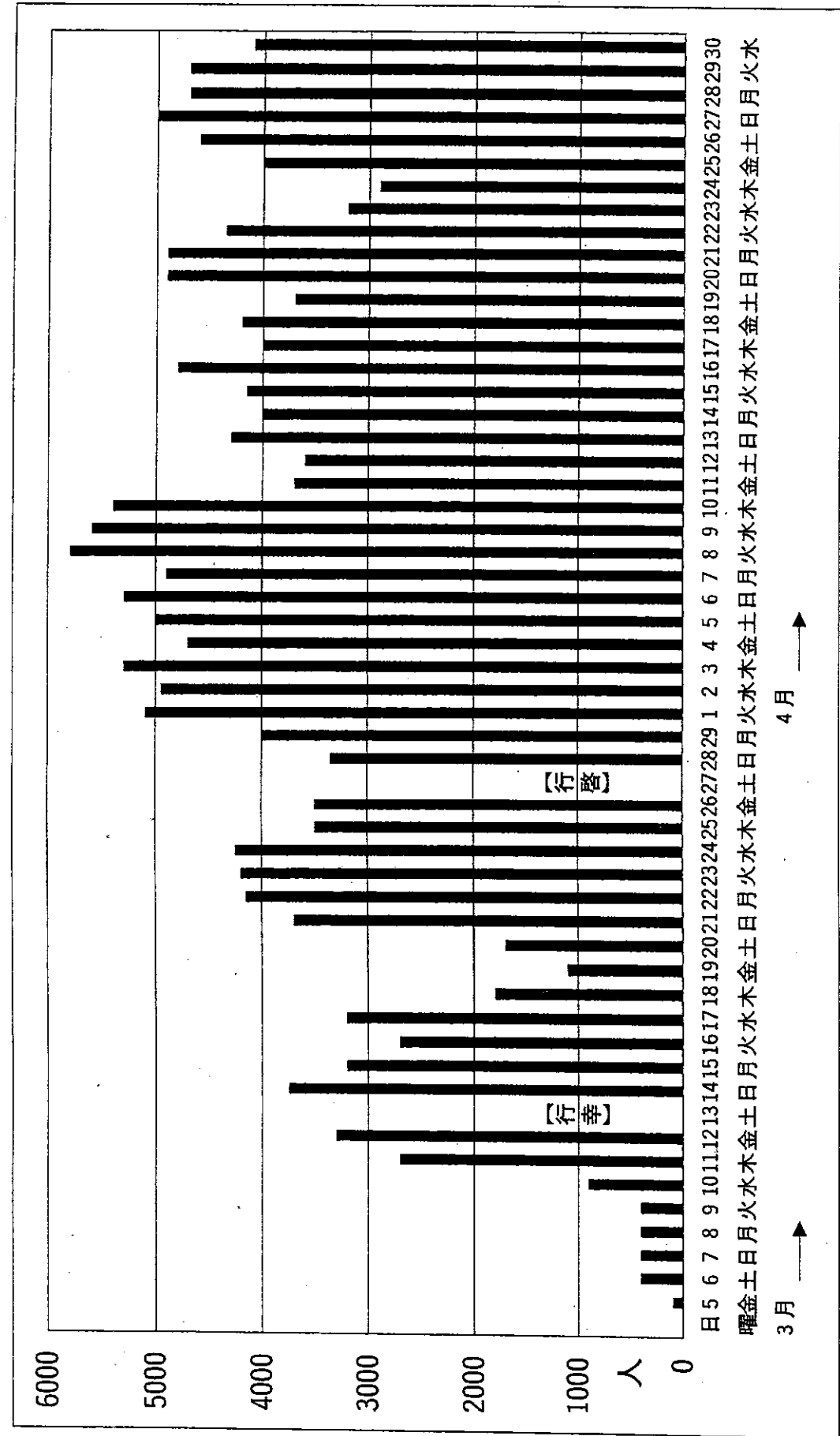
<p>今其管する所ノ個目ハ</p> <p>天造物 動物植物礦物三科ノモノヲ研究シテ其 性質ヲ究メテ其用途ヲ示スルモノヲ指シテ 天造物ト云フ</p> <p>人工物 新發明ノモノ及古來ノモノニテ 人類ノ手ヲ以テ造ラレタルモノヲ指シテ 人工物ト云フ</p> <p>博物館 天造物人工物ノ性質用途ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ博物館ト云フ</p> <p>博物館ノ種類 動物植物礦物三科ノモノヲ 陳列シテ其性質用途ヲ示スルモノヲ指シ テ動物植物博物館ト云フ</p> <p>書籍 書籍ノ性質用途ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ書籍ト云フ</p> <p>博物館ノ沿革 博物館ノ沿革ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ博物館ノ 沿革ト云フ</p>	<p>博物館ノ沿革</p> <p>動物植物礦物三科ノモノヲ研究シテ其 性質ヲ究メテ其用途ヲ示スルモノヲ指シ テ動物植物博物館ト云フ</p> <p>書籍 書籍ノ性質用途ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ書籍ト云フ</p> <p>博物館ノ沿革 博物館ノ沿革ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ博物館ノ 沿革ト云フ</p>
--	--

<p>博物館ノ沿革</p> <p>動物植物礦物三科ノモノヲ研究シテ其 性質ヲ究メテ其用途ヲ示スルモノヲ指シ テ動物植物博物館ト云フ</p> <p>書籍 書籍ノ性質用途ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ書籍ト云フ</p> <p>博物館ノ沿革 博物館ノ沿革ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ博物館ノ 沿革ト云フ</p>	<p>博物館ノ沿革</p> <p>動物植物礦物三科ノモノヲ研究シテ其 性質ヲ究メテ其用途ヲ示スルモノヲ指シ テ動物植物博物館ト云フ</p> <p>書籍 書籍ノ性質用途ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ書籍ト云フ</p> <p>博物館ノ沿革 博物館ノ沿革ヲ示シ 人類ノ知識ヲ廣クシテ其進歩ヲ促スル 爲メニ設ケタルモノヲ指シテ博物館ノ 沿革ト云フ</p>
--	--

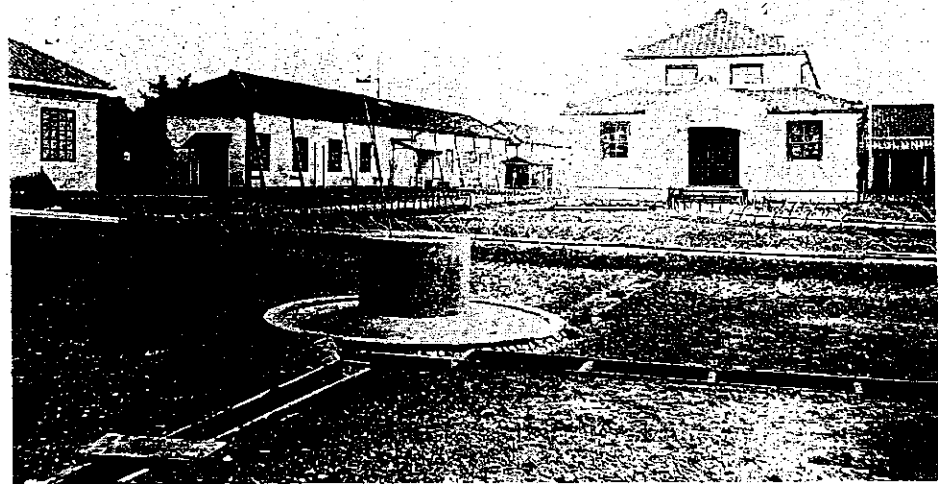
原議書のおもてと『博物館ノ沿革』

文部省

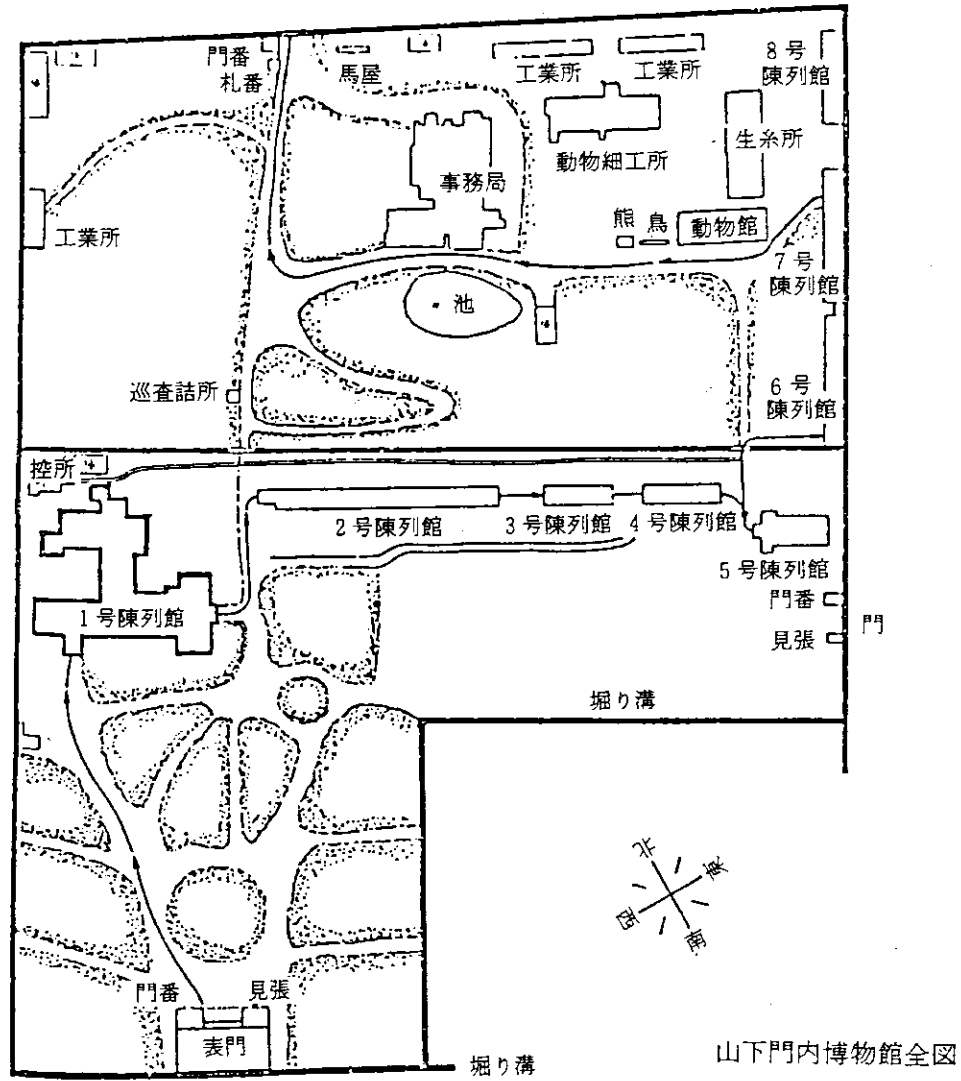
博覧会観覧者数の変化



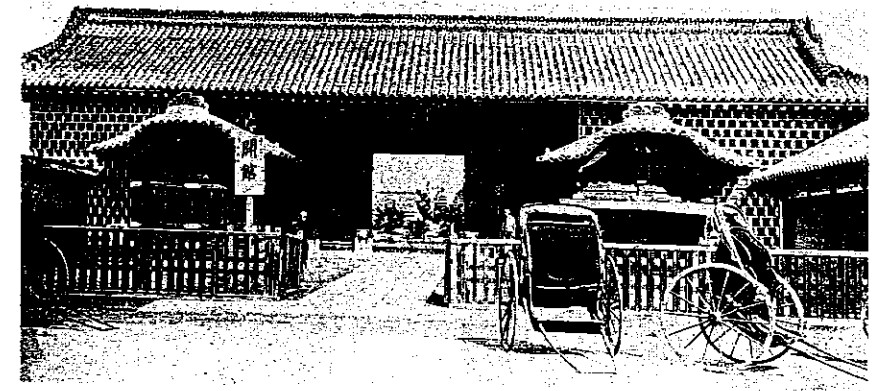
5日～9日までの5日間は官吏だけの特別観覧日



ひろびろとした山下門内博物館構内



山下門内博物館全区



山下門内博物館の表門



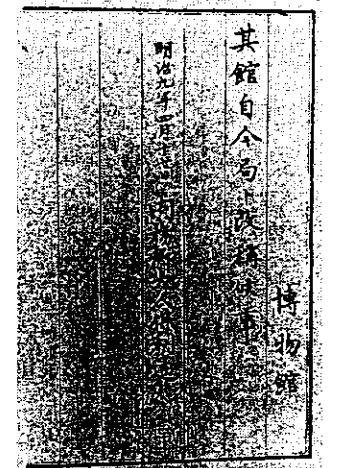
山下門内博物館で初めて開いた博覧会の開催
ビラ (明治6年)



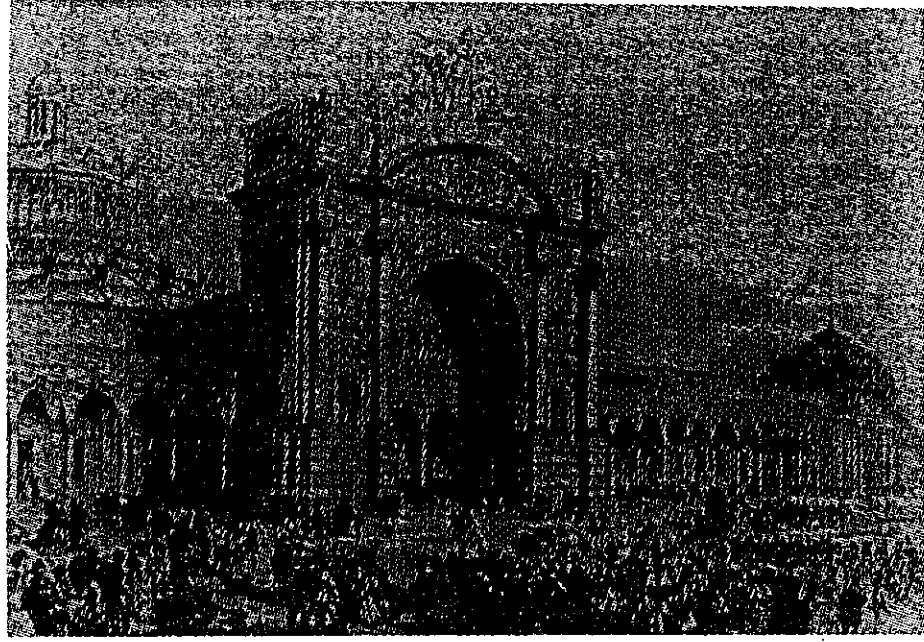
連日開館の広告



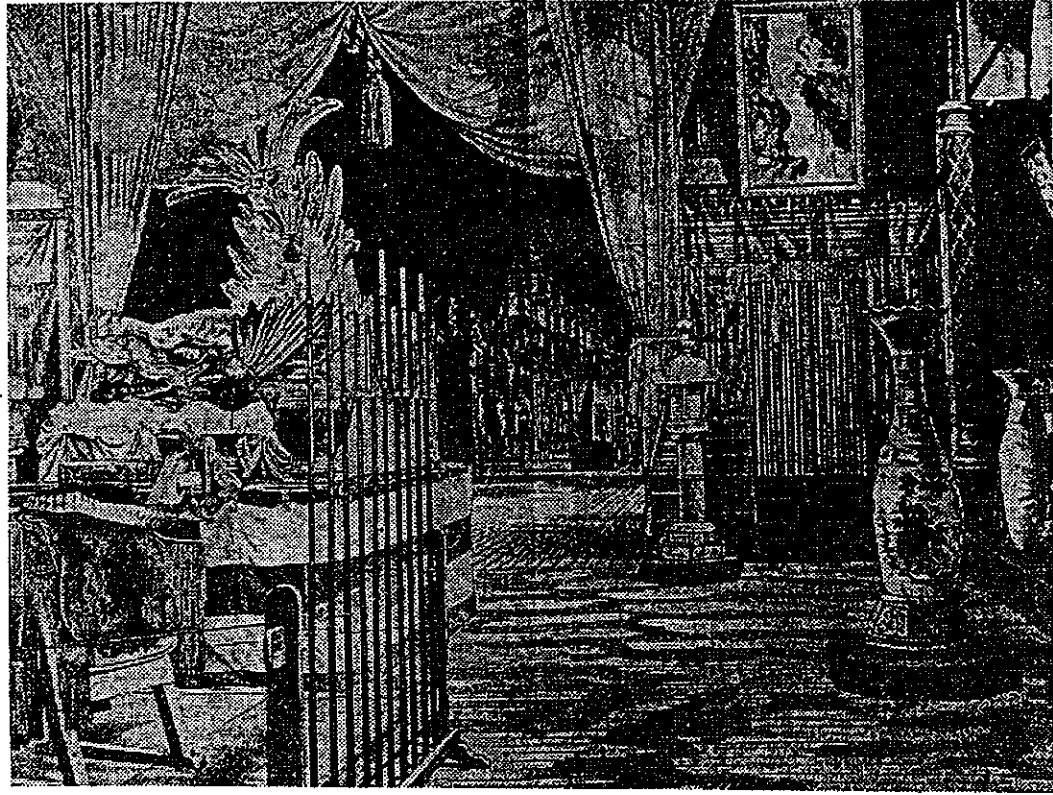
博覧会場内の陳列 (「東京開化繁昌誌」)



内務卿からの
改称の達し



ウィーン万国博覧会々場(南門入口)



ウィーン万国博覧会の日本館入口付近の陳列。鯨の陳列は写真では左であるが実際の陳列は中央(会場内から入口の方をみる)

ウィーン万国博 出品勧誘ポスター

澳地利國博覧會

来^レ西^レ年^レ澳地利國^ノ北^ニ於^テ博覧會^ヲ催^ス所國^ノ
 諸^ノ物品^ヲ若^シ出^ス自^ラ貴^國共^ニ全^ク所國^ノ産^出品^ヲ出^シ願^フ
 次^ニ第^一次^ニ所^ノ容^積可^ク相^成若^シ又^ハ官^ノノ^ニ出^ス品^ノ一^ニ回^ニ送^ル送^ル方^ニ
 相^願者^ノ其^ノ品^ヲ抱^キ寄^リ事務局^ニ與^テ豫^メ證書^ヲ引^替
 運^送ノ^ノ入^金一^切官^ノ給^セル^ニ差^送可^ク申^事

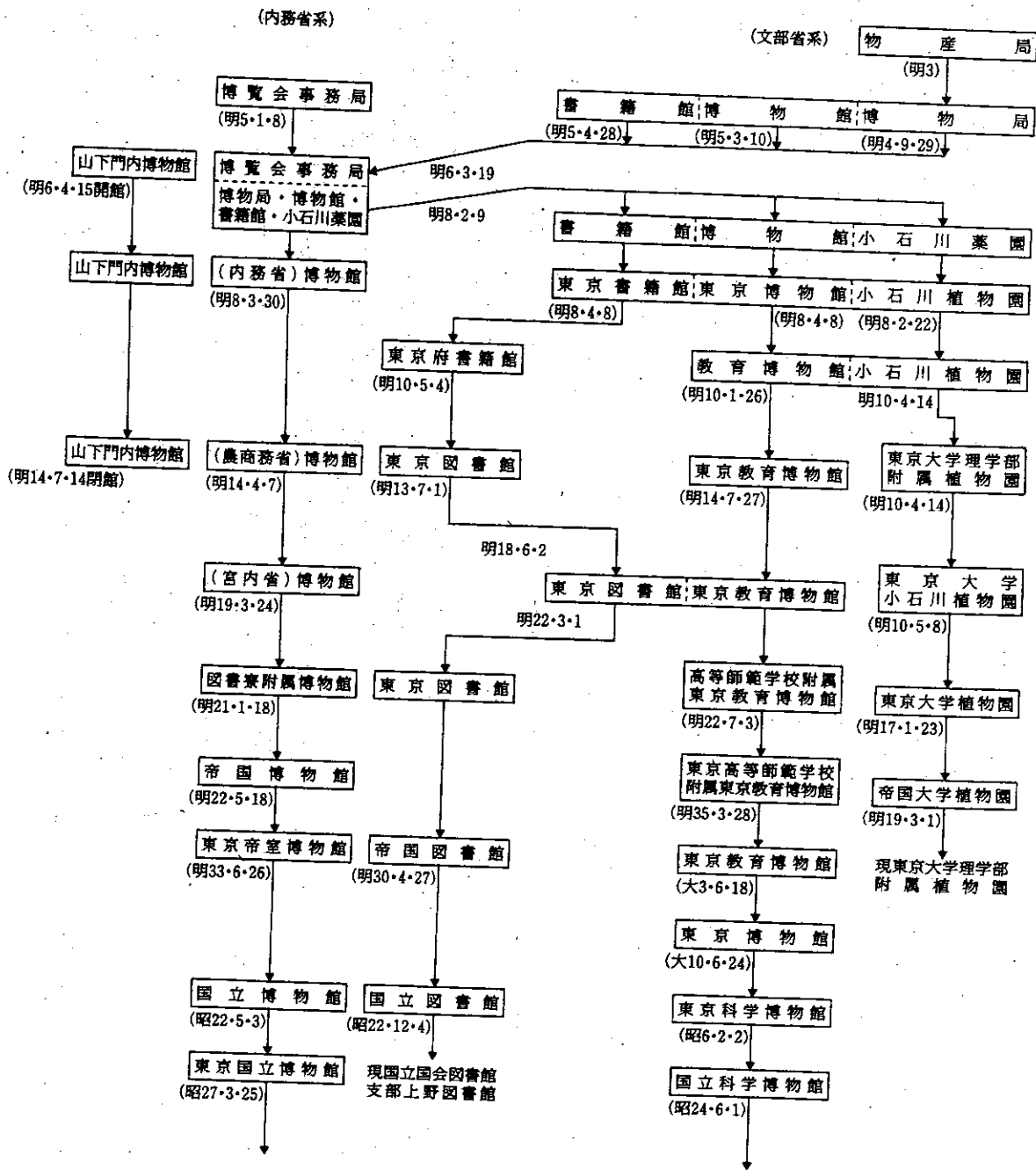
物^品産^品製^造等^ノ者^ノ況^シ尤^モ肝^要者^ノ其^ノ者^ノ況^シ
 者^ノ事務局^ニ持^テ來^ル可^ク改^メ其^ノ況^ヲ寄^リ所^ノ賞^譽
 有^ル事^ニ

右^ノ品^物取^集方^ニ等^ノ者^ノ来^ル六^月晦^日を^限ト^シテ^ハ一^ニ限^リ
 有^ル志^ス者^ノ其^ノ以^前日^比谷^門内^{博覧會}
 事務局^ニ出^申ス^ル事^細差^示可^ク申^事

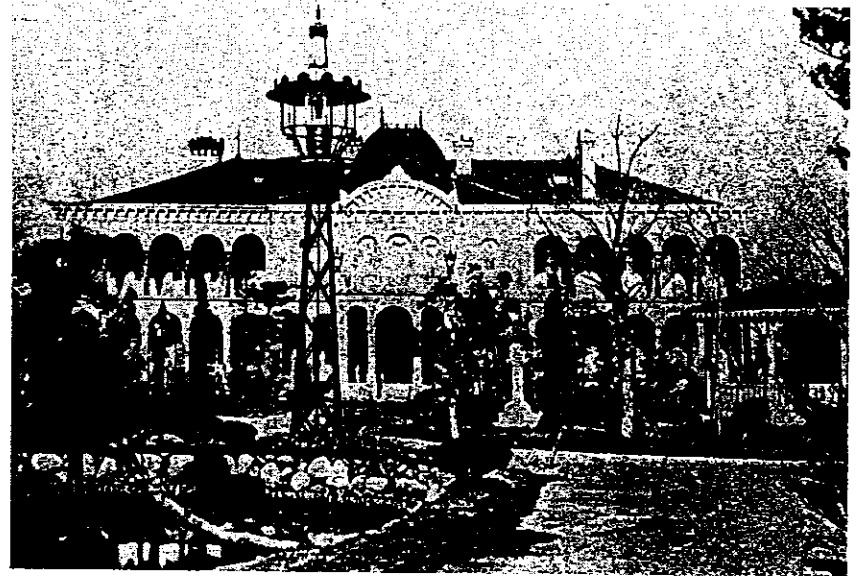
二月

博覧會事務局

博物館変遷図



※カッコ内の年月日はその機関の設立時。
無カッコで記入した年月日は統合・分離の時期を示す。



鹿鳴館の外観

鹿鳴館設置のため、博物館を追い出す

明治新政府は、国内における各種の近代化政策が安定し、殖産興業などによる産業の発展は、各地に見られる博覧会の開催などによって達成されつつあると考えるに至り、新たな方向を追い求める事となる。その一つに幕末以来諸外国と結んできた不平等条約の改正があった。それには何よりも、日本は野蛮な国ではなく、欧米諸国と同じように文明国であるという事を印象付けることが必要であった。そのため、親睦のための社交場として、また来日する国賓の歓迎などのためにも、それ相応の接待所を持たねばならなかった。

そこで建設場所の物色ははじまるが、横浜から上京する外国人のために上りの終着駅である新橋駅から近く、また築地の外国人居留地や霞ヶ関の外務省にも近い場所という事で、当時内務省が管理し、広大な敷地に建物が散在する山下門内博物館の所在地が考えられるに至ったのである。

明治十三年(一八八〇)一月、外務卿井上馨は、内務卿松方正義にあて、博物館として使用している土地を譲り受けたいと申し込むのである。内務省としては、大久保利通の時代であれば断ることもできたであろうが、何かと槍舞台に立つ外務省の権力と政策に逆らうことはできなかった。

そこで内務卿は、六千坪の土地だけは譲りわたすが、この土地には山下門内博物館があり、それを主管している博物局と協議をさせたいとしているが、外務省が取得を希望している場所は、博物館の表門を入れて正面の一号陳列館のある地域であった。(この一号陳列館は、八号まである陳列館の中では二七坪と最も広い中心となる陳列館であった。)

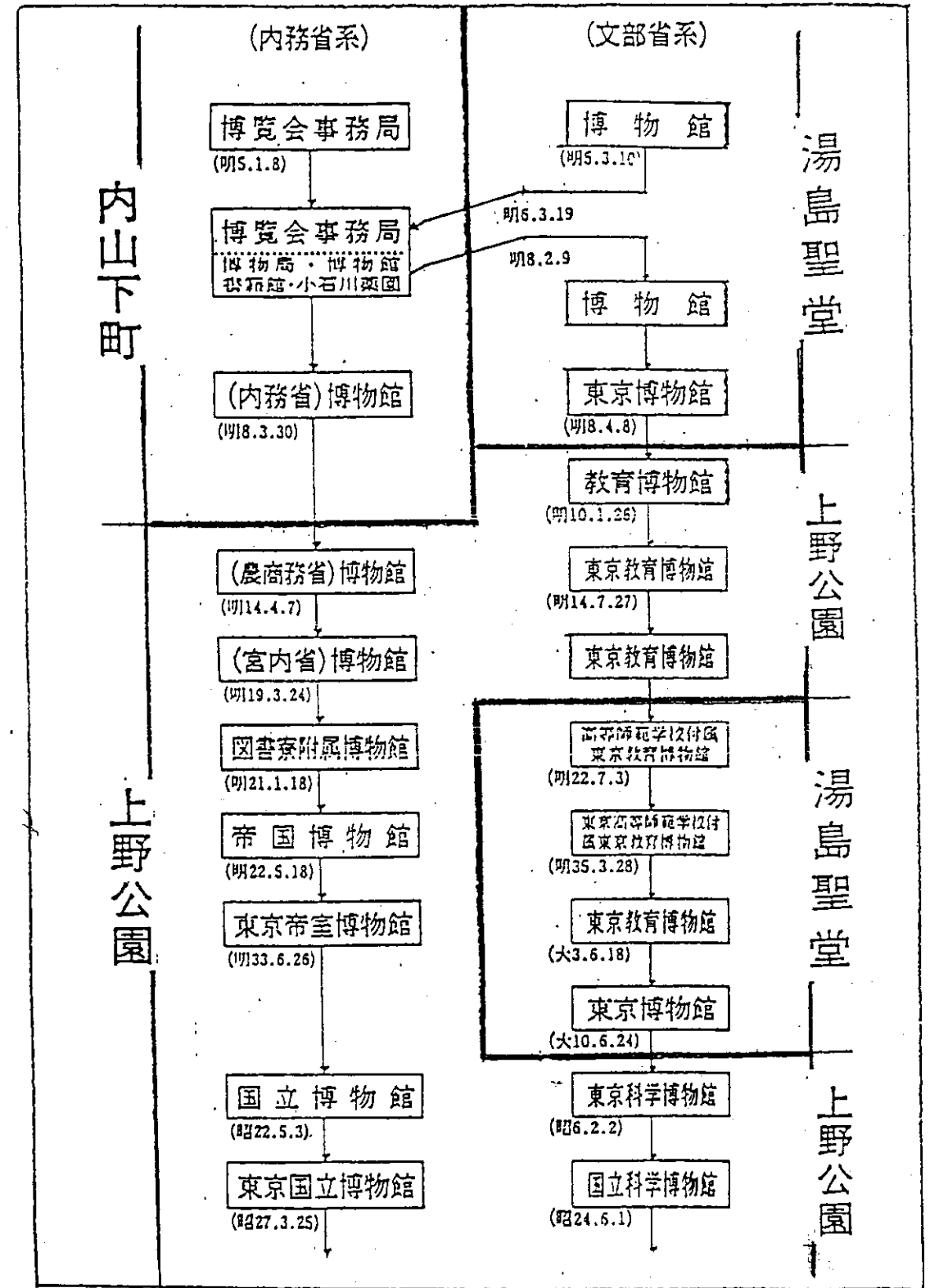
明治十四年(一八八一)一月五日内務卿は、博物局に対し、「一号館の物品及植木類を至急取除キ会計局へ引渡可申候」と達する。ここには「至急」とあるので、博物館は翌一月十六日から全館を閉館にして、一号陳列館の片付けを始めるのである。その移動先として内務省が上野公園内にコンドル設計で建設を進めている新博物館があった。ところがこの新博物館は、第二回内閣勸業博覧会の美術館として使用することが決定しており、工事を急いでいた。もともと内閣勸業博覧会の美術館としての使命が終れば、内務省所管の新博物館となる建物であるため、一階は内閣勸業博覧会の時に陳列場として使用するにしても、二階の陳列室は、いそいで移転しなければならぬ。

山下門内博物館一号陳列館の資料の置き場所にした。こうして、明治十四年(一八八一)一月二十八日から上野公園内への移動を始め、二月三日にはすべての移動を完了した。その間わずか一週間である。こうして会計局には二月一日に土地、建物を引き渡した。博物局は、内務卿から移転を命じられてからわずか二日間、一号陳列館と附近の植木類を片付けて上野へ移したことになる。これ等の移転にかかった経費は、すべて外務省の応接所建設費から支出されたが、そうまでして応接所の設置が急務であったのであろうか。その後二階建て四四〇坪余のレンガ造りの建物が建設された。鹿鳴館と名づけられて、華やかな舞踏会などが繰り広げられ、いわゆる鹿鳴館時代が到来する。

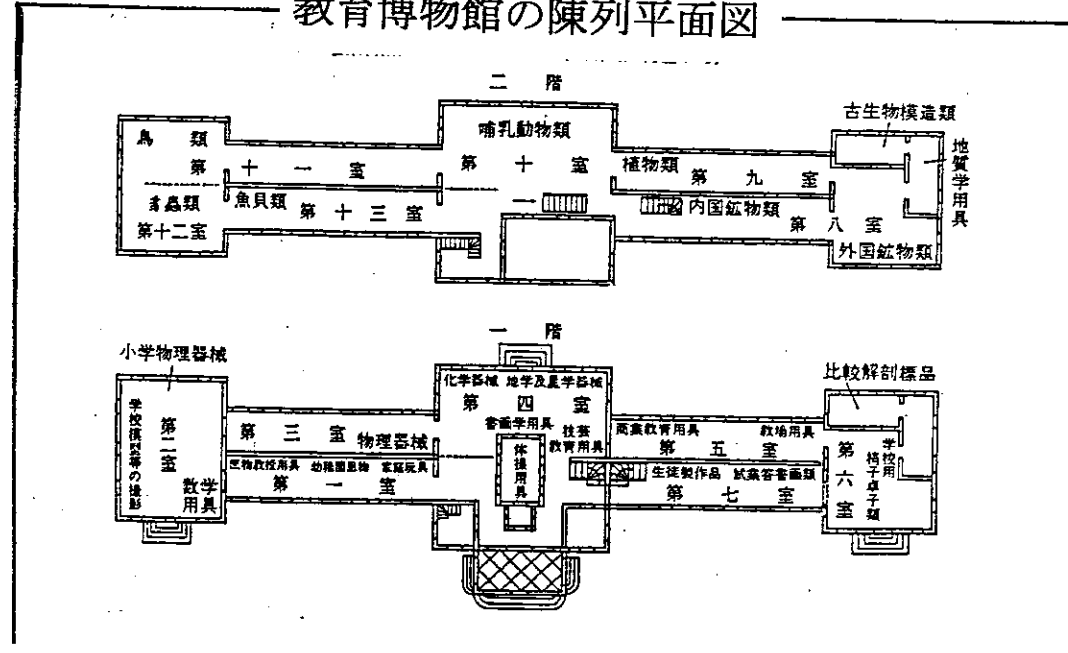
内務省・文部省系博物館の所在地の変遷

年	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
府県名																	
北海道						(開拓使札幌博物場)					(札幌農学校付属博物館)						
秋田							(函館仮博物場)										
山形																	
福島																	
東京	(博物局・博物館)				(東京博物館)	(教育博物館)					(東京教育博物館)						
新潟																	
石川																	
福井																	
愛知																	
長野																	
三重																	
滋賀																	
京都																	
大坂																	
和歌山																	
鳥根																	
広島																	
愛媛																	
福岡																	
長崎																	
大分																	
鹿児島																	

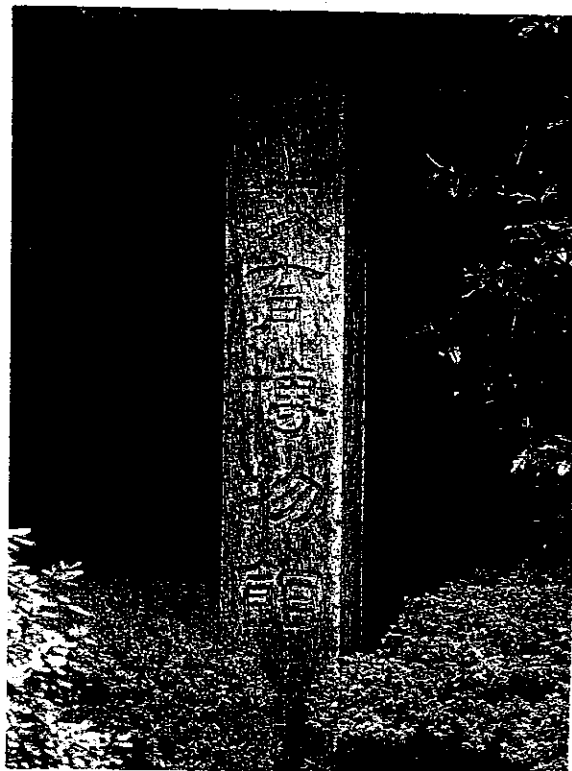
明治前半期における主な観覧施設



教育博物館の陳列平面図

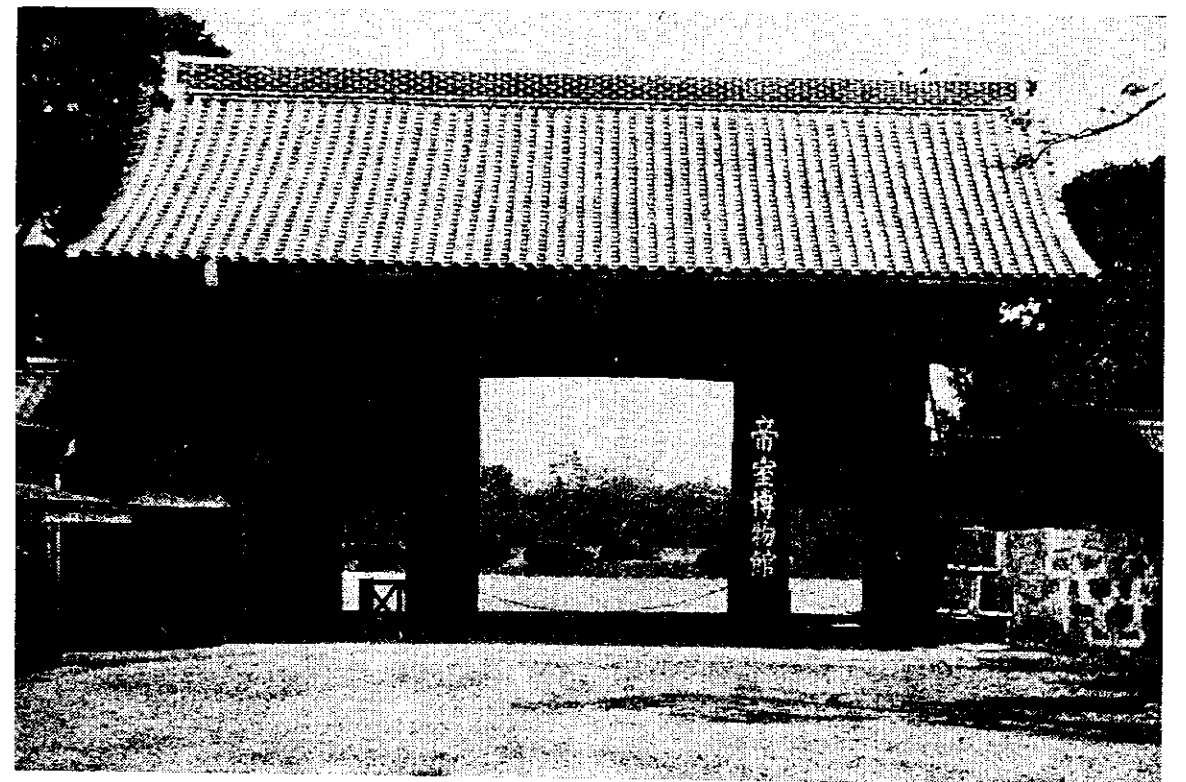


森鷗外 (帝室博物館略史)

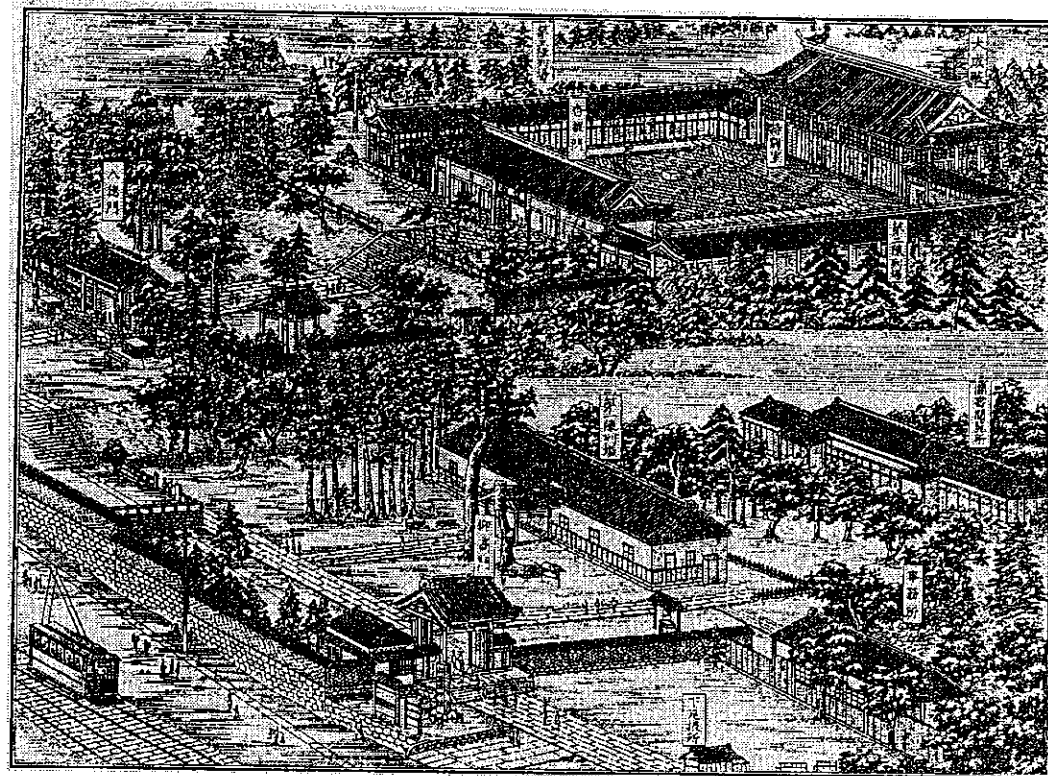


明治13年博物館一覽表

名称	地名	設立年	何立	謝金	物品数	来観人員	歳費金額 円	主管者
東京大学理学部 博物館	東京神田一橋通町	明治13年	官	...	32,981	東京大学
教育博物館	同上野西四軒寺跡	同4年	同	無	26,282	205,095	21,313,603	箕作秋坪
教育博物館	大阪北区常安町	同11年	公	...	670	7,693	215,334	村上六郎
教育博物室	出雲国松江殿町	同12年	同	無	49	167	横田悌信
福岡博物館	筑前国福岡天神町	同11年	同	有	1,461	10,017	690,000	橘公毅
鹿児島教育博物館	薩摩国鹿児島吉野村	同12年	同	...	1,237	35,630	黒田才蔵



帝室博物館正門



東京教育博物館 大正10年、東京博物館と改称

品名	現在数	品名	現在数
家庭及幼稚園用品	600	物理学器械及製造具	652
実物教授用具	114	化学器械及薬品	548
数学科教具	80	生理学標本	81
図画標本及器具	212	動物学標本及器具	397
体操遊戯及身体検査用具	80	植物学標本及器具	216
校舎建築図及模型	74	鉱物学標本及器具	473
内外国学校写真	1,158	手工科教具及成績表	1,270
学校用卓子椅子及其模型	55	農学標本	15
教場用具	103	幻燈器械及映画	363
生徒用具	189	工芸材料及製品標本	2,244
賞与品及卒業證書類	1,507	裁縫科教具	75
音楽科用具	35	諸学校生徒成績品	1,471
歴史科教具	75	其他雜	1,317
地理科教具	133	図書	12,800
星学用具	31	合計	26,368

東京博物館の所蔵資料数

東京図書館兼東京教育博物館主幹
 東京図書館兼東京教育博物館庶務掛
 東京図書館図書掛兼両館庶務掛

東京教育博物館動物掛
 東京教育博物館植物掛
 東京教育博物館金石掛兼器械掛
 東京教育博物館器械掛
 東京教育博物館画工
 東京図書館兼東京教育博物館写字掛
 東京教育博物館看守取締
 東京教育博物館看守

手島精一
 西村竹間
 東浦房次、秋間球磨、中根肅次、堅田久考、鈴木鋭一、足立善時、浅見悦二郎、河合謙三郎、三宅東一郎、前島栄太郎
 波江元吉、松浦歆一郎
 櫻井半二郎、大沼宏平
 高木玉太郎、藤森峰三
 直村典、海福悠、澤野榮太郎
 平木政次
 藤森慶興
 熊谷謙作
 竹島源四郎、新義平、桂香

(明治19年4月2日現在)

東京図書館・東京教育博物館「分課簿」

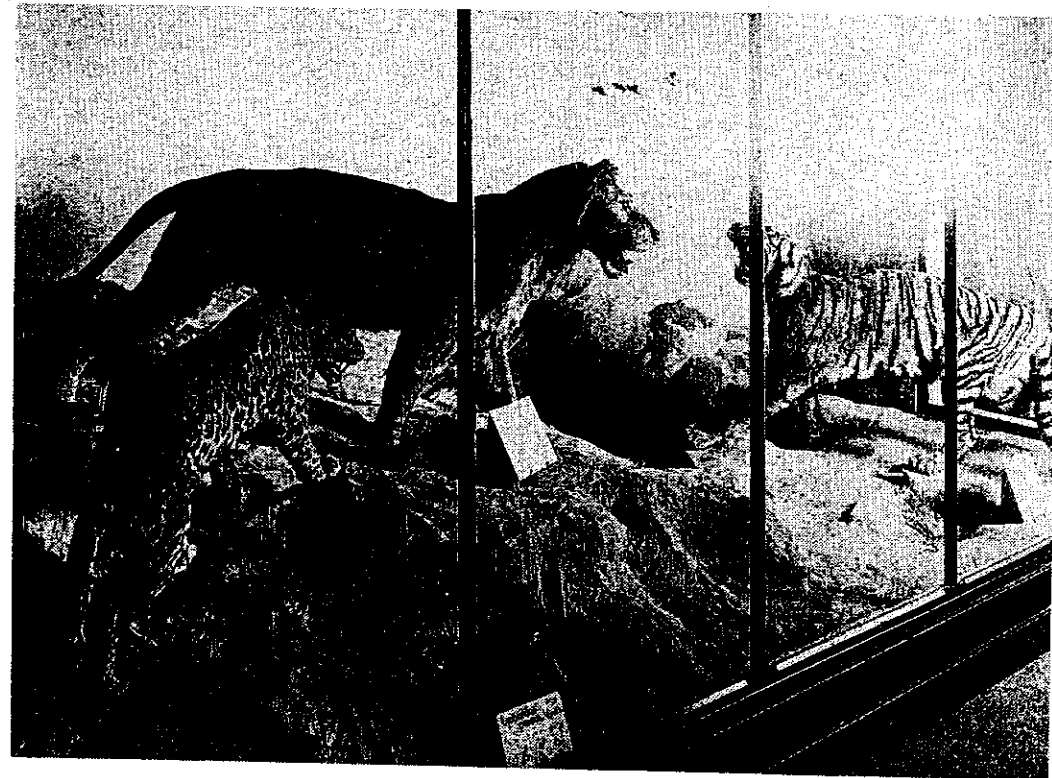


東京教育博物館 右側の小さな2階建ての建物が図書閲覧室

通俗教育の生態陳列

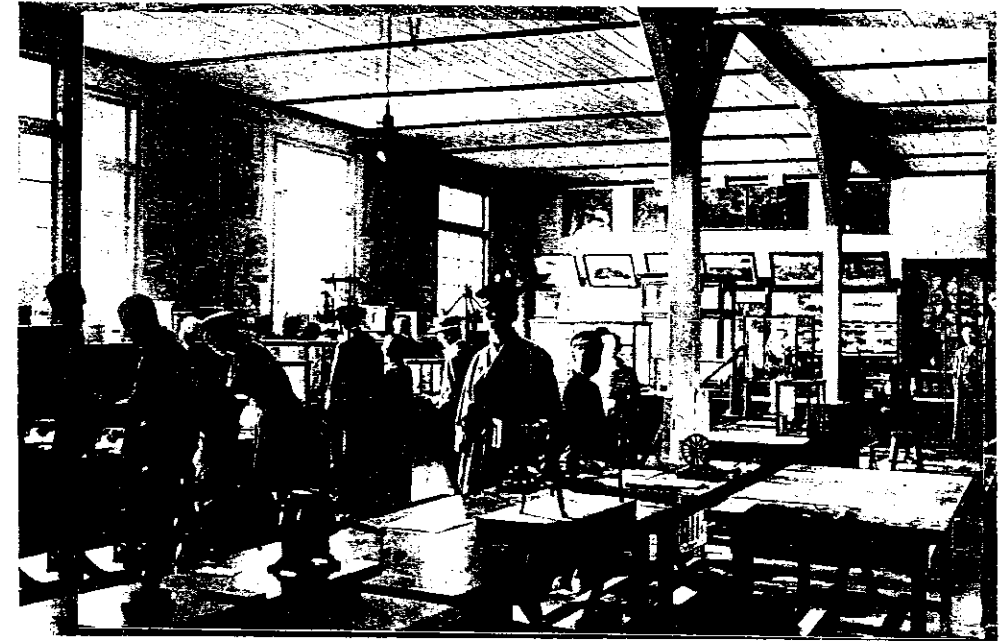


東京博物館の鳥類



東京博物館の哺乳類

東京教育博物館時代



通俗教育館内景

明治44年5月「通俗教育調査委員会官制」が公布され、東京高等師範学校も本館の第一陳列館内に通俗教育館を併設し、大正元年11月30日から一般公開した。



第三陳列場内景

明治39年糊橋はここに教育歴史部を新設し、教具、写真、教科書の教育史及び教育史研究の資料を展示した。

大正期の特別展覧会

虎列拉病予防通俗展覧会	大正5年9月下旬～大正5昭11年中旬	40,000
大戦と科学展覧会	大正6年11月17日～大正6年12年16日	40,000
食物衛生経済展覧会	大正7年3月2日～大正7年3月31日	17,000
天然痘予防展覧会	大正7年3月12日～大正7年4月11日	23,000
廃物利用展覧会	大正7年6月22日～大正7年8月31日	67,000
家事科学展覧会	大正7年11月2日～大正8年1月15日	50,000
災害防止展覧会	大正8年6月4日～大正8年7月10日	183,605
生活改善展覧会	大正8年11月30日～大正9年2月1日	107,670
「時」展覧会	大正9年5月16日～大正9年7月4日	222,845
鉱物文明展覧会	大正10年3月21日～大正10年5月22日	117,437
計量展覧会	大正10年6月6日～大正10年7月5日	110,251
印刷文化展覧会	大正10年9月25日～大正10年10月25日	313,580
活動写真展覧会	大正10年11月20日～大正10年12月10日	131,353
運動体育展覧会	大正11年4月30日～大正11年5月31日	168,284
消費経済展覧会	大正11年11月12日～大正11年11月29日	126,407
動力利用展覧会	大正12年5月13日～大正12年6月27日	93,015
乳展覧会	大正13年5月11日～大正13年6月1日	23,710
衛生工業展覧会	大正13年7月6日～大正13年8月1日	27,937



東京教育博物館新展示館
大正6年東京帝室博物館構内にあった教育学芸館を移築した。これにより、展示面積は6倍になった。

解説文にも新しい方式が試みられている。
展示されている天産資料、理学資料のなかから具体例をあげて説明しよう。

天産資料解説文の一例

此水族器にゐる動物は

黒い甲 ゲンゴラウ
体の大きくて扁平たい タガメ (又はカッパムシ)

カマキリのやうな ミヅカマキリ
水面を舞ふ ミズスマシ

である。何れも淡水にゐて小さな動物を食べる。精しいことは裏の図書室
で昆虫生態学を御覧なさい。又水草はキンギョモ、フサモである。

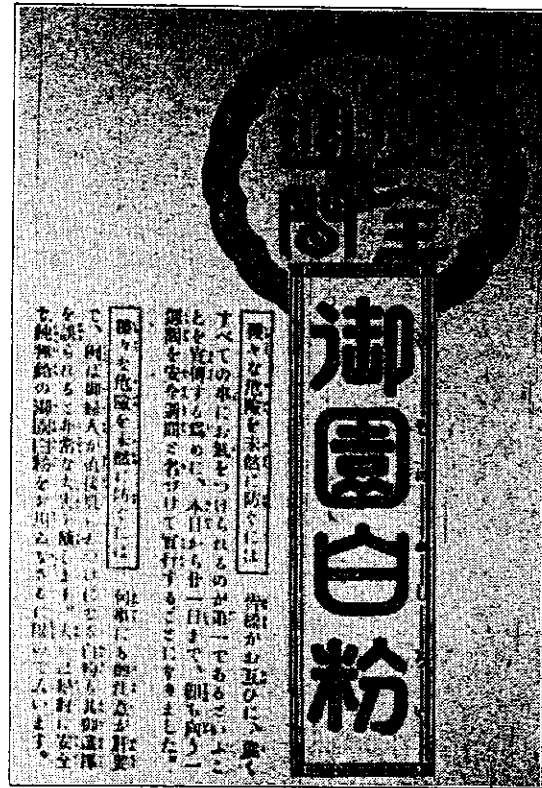
理学資料解説文の一例

これは「ハンドダイナモ」である。

「ハンドル」を右方に廻転すと左方にある場磁石の間の発電子が
廻転して電流を起す、この電流は電線に伝はって種々の事に用ゐられる。

左の前の方にある棒の端の電灯が点火のは電流が電球の中の炭素線に
来ると通過にくだいで光と熱とを発すからである。大仕掛の発電所では
水力や蒸気力で発電子を廻転す。精しいことは裏の図書室で実験物理
学第696頁と第736頁とを御覧なさい。

これらの例示で判明するように、解説文はかなり平易な文章で、そして漢字にはすべて意味の通ずるよりに仮名を付している。また、詳しく知りたい観覧者のために図書室で参考書を見るよりにと、書籍名と頁数をあげている。これは観覧者の立場を考えた実に親切な解説文であり、新しい試みの解説形式であったのである。今日の博物館施設には、このような形式を踏襲している所は寡聞にして知らない。また、この例示中にみられる「裏の図書室」とは、図に示した「図書閲覧所」がそれであって、図書総数26,493冊、邦文の新聞雑誌217種、外国雑誌8種が保管されており、専任の職員が配置されて観覧者に対応している¹⁹⁾。



「安全週間」のマーク

ご迷惑を掛けてまことに
申し訳ありません
安全第一で作業中
です しばらくの間
お許し下さい

完成予定 年 月

緑十字 安全第一で作業中

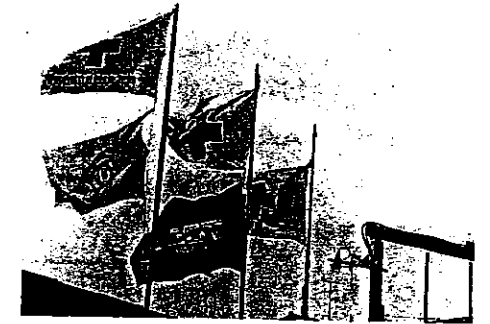
災害防止展覧会の開催で「安全週間」と「緑十字」を定める

湯島の聖堂構内にあった東京教育博物館は、大正8(1919)年5月4日より7月10日まで「災害防止展覧会」を開催した。この展覧会は、工場の災害防止、交通の安全、火災の予防など、人の安全に関する知識の普及をねらいとするものであった。当時、こうした展覧会を開く折には、関係資料を館内に陳列して見せるだけでなく「附帯事業」といって、講演会、活動写真会、解説書の発行などさまざまな事業活動を展開した。その活動の一つとして、災害防止展覧会のときには「安全週間」が設けられた。

この安全週間は、東京教育博物館長棚橋源太郎、安全第一協会理事蒲生俊文、上野警察署長池田清、この3人によって発想され、官界、実業界、教育界、婦人団体などの参加した発起人会で、6月15日から21日までの1週間と定められた。また、この時シンボルマークを設定することが検討され、当時アメリカの全米安全会議が青地に白十字を入れており、日本では結核予防のマークに白十字が使用されていたので、十字を取り入れることになり、結局安全週間のシンボルマークは「緑十字」に定められた。

こうして安全週間は、東京市と周辺の町村が参加して、第1回目が実施された。「安全第一」のピラ、ポスターが街にあふれ、市電はすべて緑十字をつけて走り、家庭には「火の用心・街路の用心・盗難の用心」の注意書が配られてこの事業は大きな成果を挙げた。そのため展覧会の方も絵入場数は183,605人、1日の平均でみると2,700人で、当時としては予想もしなかった記録となった。

更に、この展覧会を機に「中央災害防止協会」が設立され、この協会が中心となって、以後毎



工事現場の緑十字 (筆者提供)

年「安全週間」を実施することになり、緑十字がこれを象徴するものとなった。その後昭和2年になって、緑十字は、1道2府21県連合工場安全週間を開催するに当たって開かれた内務省社会局の全国工場監督主任会議の席上で、国としての安全運動のシンボルマークにすることが了承される。そのため今日なお工事現場などでこのマークが必ず用いられている。

「安全週間」は、その後次第に各地に波及し、「安全デー」「安全月間」などさまざまな形で実施されるようになる。ところが昭和3年になって、全国いっせいに実施することになり、「全国安全週間」と改称されて、7月2日から7日までとなった。この全国安全週間は、第2次大戦中も中断することなく続けられ、一時厚生省の主唱で10月1日から実施されたこともあったが、現在は7月の1週間が充てられて続いている。

なお、日本で緑十字がシンボルマークに決まった時、蒲生俊文は全米安全会議に手紙を送り、アメリカも日本と同じように緑十字を使用してほしいと勧めた。これには全米安全会議も驚いたが、結局アメリカも1947(昭和22)年からこのマークを使用するようになった、と「日本の安全衛生運動」の中に記してある。

当時湯島の聖堂構内にあった文部省所属の東京教育博物館で、大正九年（一九二〇）五月一日から七月四日までの五〇日間、「時」の展覧会を開催した。館長柳橋源太郎によるとこの展覧会は、人びとが時間を尊重する念に欠け、仕事や社交上あるいは日常生活の上で貴重な時間を消費しているのを、この様な風潮を改めさせるために実施したものであると述べている。その展覧会の内容は「時の制度制定及報時」「執務休養及社交の時間」「特別なる時間の善用」「記憶すべき時間」「時と災害事故」「時と事業」「時と自然」の七セクションに分けて紹介された。当初の会期は一月間であったが、好評であったため会期を延長している。観覧者は総数三二一、八四五人であり、一日の平均では四、五〇〇人になり、当時としては未曾有の盛況であった。

この展覧会の開催に当たって、博物館の関係者は、時間を尊重する思想を一般の人々に吹き込む為にはどうしたらよいか、頭を悩ましたのであるが、この時たまたま展覧会の開催期間中に来て来た「六月一日」が話題になった。これは「日本書紀」の天智天皇一〇年の条に「夏四月、丁卯の朔にして辛卯の日、漏刻を新しき台に置き、はじめて候時を打て鐘鼓を動しき、はじめて漏刻を用ひしなり」という記事に見られるように、水時計を用いて時間を知らせたという事があるが、この日を現在の太陽暦になおすと「六月一日」にあたるのである。この事から、この日に何か記念行事を行なうて展覧会を盛り上げることが考えられるに至ったのである。そして名称については、いろいろと検討され「漏刻祭」とか「時間励行デー」などが有力候補として話題にあがったが、結局「時の記念日」として実施することに決まったのである。

この時は、第一回の時の記念日ということで、時間尊重についての宣伝ピラを配布することが中心であった。これには日本女子商業学校、淑徳女学校、東洋高等女学校、千代田高等女学校、東京家政女学校、芝中学校等の生徒、深川小学校婦人同窓会や東京少年団員が銀座、日本橋、日比谷、上野、浅草など人通りの多い場所です万枚のピラを九日と一〇日の両日にわたって配布した。また、芝中学校、深川小学校婦人同窓会、東京少年団の人たちは、浅草、上野、須田町、日本橋、銀座の五か所で、天文台から借りてきた標準時計（クロノメーター）で通行人に対し「正しい時間にお合わせ下さい」とすすめている。この時参加した生徒たちが体験した感想を「教材収録」の臨時号で紹介しており、それには、

- ①ピラを渡すのは面白いが「時計を直して下さい」と言うのと怖い顔をする人がいる
- ②「標準時間とは何か」と聞かれてちよつと困った
- ③メタルの付いた鎖を下げていた人に「時間を合わせて下さい」というと、そのまま行き過ぎた。向うで夕刊を買うのを見ていたら時計でなく蠟燭口だった
- ④ピラを受け取ると読みもしないで丸めてしまう人がいる。これは立派な女の人に多い
- ⑤どこかのお爺さんは、一人で三つの時計に時間を合わせていた

昔と今の時の呼称比較

時	八時	六時	四時	二時	零時	十時	八時	六時	四時	二時	時	現在の時	十二支名
時	辰の刻	未の刻	申の刻	酉の刻	戌の刻	亥の刻	子の刻	丑の刻	寅の刻	卯の刻	辰の刻	子時	子
時	五	六	七	八	九	四	五	六	七	八	九	卯時	卯
時	夜四時	夜五時	朝六時	夕七時	夜八時	朝九時	朝四時	朝五時	朝六時	朝七時	朝八時	辰時	辰
時												巳時	巳
時												午時	午
時												未時	未
時												申時	申
時												酉時	酉
時												戌時	戌
時												亥時	亥
時												子の刻	

生活改善同盟会が出品した「昔と今の時の呼称比較」

婦人結髪時間

東京府立第一高等女学校出品した婦人の結髪時間

一束にして組みたるもの
平均五分半（観察八人）

二束にして組みたるもの
平均七分半（観察四人）

前髪一ひと組みたるもの
平均五分半（観察三人）

前髪二ひと組みたるもの
平均六分（観察六人）

一束にしてたるもの
平均六分半（観察三人）

前髪を分けたもの
平均八分（観察七人）

中髪二に分けたもの
平均九分半（観察八人）

前髪三本のものを
平均十分半（観察五人）

前髪四本のものを
平均十五分（観察三人）

普通婦人の結髪に要する時間

三輪 四十五分（観察五人）

唐人髷 四十五分（観察五人）

銀杏返 四十分（観察五人）

鳥田 五十五分（観察五人）

東髪 四十分（観察五人）

丸髷 四十五分（観察五人）

杭刺 四十五分（観察五人）

東京府立第一高等女学校出品

東京府立第一高等女学校が出品した婦人の結髪時間